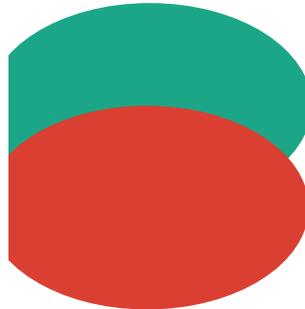


# 20140224

## 絵本学会 NEWS No.50

発行：絵本学会  
発行日：2014年2月24日  
編集：絵本学会広報委員会  
絵本学会事務局：〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1  
日本女子大学児童学科 石井光恵研究室内  
E-mail:ehon-g@xqe.biglobe.ne.jp  
<http://www.u-gakugei.ac.jp/ehon/index.html>



絵本学会

第17回絵本学会大会開催のお知らせと発表者募集  
第16回絵本学会大会報告  
—シンポジウム「共に生きる 絵本にできること」  
2012年度絵本フォーラム報告  
—「スズキコージ 解体！」  
理事会報告  
絵本展覧会情報  
絵本も、紙芝居も。 野坂悦子

### 第17回絵本学会大会開催のお知らせ

#### 絵本とアート — 絵本のつくり手たち、その創造力

★期日：2014年5月31日(土)・6月1日(日)

★会場：刈谷市総合文化センター

(JR・名鉄三河線「刈谷駅」南口よりウイングデッキ直結徒歩3分)

<http://www.kariya.hall-info.jp/>

★参加費：会員 1,000 円、一般 2,000 円（一日のみ参加の場合 1,500 円）、学生会員・大学生以下無料

★主催：絵本学会・刈谷市美術館

★共催：刈谷市総合文化センター

★プログラム（予定）：

#### 第1日目 5月31日(土)

12:00～ 受付

12:40～ 開会式

13:00～ 宇野亜喜良トーク&ライブペインティング

15:30～ 研究発表

17:00～ 絵本学会総会

18:00～ 交流会（会場：刈谷市産業振興センター 401会議室）

#### 第2日目 6月1日(日)

8:30～ 受付

9:00～ 研究発表

12:00～ 休憩

13:00～ 作品発表

15:00～ ラウンドテーブル

#### R1「瀬川康男の絵本表現」

話題提供者：松本育子（刈谷市美術館）

辻村益朗（絵本作家）

川崎康男（福音館書店編集者）

コーディネーター：広松由希子（絵本研究家）

#### R2「レオ・レオニの絵本作り」

話題提供者：佐々木丈夫（公文教育研究会研究職・白百合女子大学、生涯発達研究教育センター特別研究員）  
ほか

コーディネーター：藤本朝巳（フェリス学院大学）

#### R3「子どもと絵本をよみあうーかがくいひろしの絵本の場合ー」

話題提供者：廣田真智子・西脇由利子（絵本研究家）  
水島尚喜（聖心女子大学）

コーディネーター：鈴木穂波（岡崎女子短期大学）

17:10～ 閉会式

大会期間中、学会員（作品発表者）の作品展、刈谷市美術館コレクション展を刈谷市総合文化センター展示ギャラリーにて開催します。

#### ★第17回絵本学会大会実行委員会

委員長：鈴木直樹（刈谷市副市長）

事務局：刈谷市美術館 松本育子

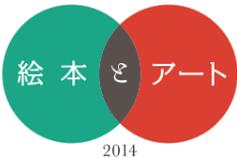
〒448-0852 愛知県刈谷市住吉町4丁目5番地

電話：0566-23-1636 FAX：0566-26-0511

E-MAIL: matsumoto-i@city.kariya.lg.jp

#### ★宿泊先について

会場周辺には多数の宿泊施設があります。今回、実行委員会では宿泊案内をお送りいたしませんので、ご宿泊先の手配等は参加者各自でお願いします。

第17回絵本学会大会  

 第17回絵本学会大会は2014年5月31日(土)と6月1日(日)の2日間、刈谷市総合文化センターで開催されることとなりました。  
 絵本学会とともに主催となる刈谷市美術館では、絵本作家・瀬川康男さんの企画展をきっかけに瀬川さんの代表的な絵本原画を収集、以後、戦後の絵本界に大きな功績を残す長新太さん、田島征三さんの作品を収集し、絵本を積極的に取り上げた美術館活動が行われています。さらに近年では、刈谷市出身の童画家・河目悌二さんや名古屋出身のイラストレーター・宇野亜喜良さんの企画展が開催されるなど、絵本に限らず、雑誌や新聞の挿絵やグラフィックデザインといった、さまざまなメディアや芸術分野にも美術館のコレクションが拡張し、質、量、ともに充実しています。  
 このような活動を展開する刈谷市美術館が関わる今回の大会では、絵本作家の表現世界への理解を美術からのアプローチによって多角的に再考し、多くの方に絵本を深く楽しんでいただく場となることをねらいとして、テーマを「絵本とアート」としました。宇野亜喜良さんを招いてのトークやライブペンティングなど、今大会ならではの企画を予定しています。会場近くに位置する刈谷市美術館では、「レオ・レオニ 絵本のしごと」展も開催されていますので、多数ご参加ください。

## 第17回絵本学会大会 発表者募集

### ●第17回絵本学会大会 研究発表募集要項

発表日：2014年5月31日(土)または6月1日(日)

発表場所：刈谷市総合文化センター

#### 1. 発表者の資格：

絵本学会の会員で、2013年度までの会費を納入済であること。

#### 2. 発表テーマ：

絵本及び絵本に関連のある研究テーマで未発表のもの。

#### 3. 発表時間：

発表 20分間 質疑応答 10分間

#### 4. 申し込み要領：

1) 発表者の氏名・住所・電話・FAX 番号・メールアドレス、2) 所属機関名・職業など、3) 発表テーマ、4) 発表要旨 [800 字程度/大会プログラム用原稿]、5) 発表時に使用する機材 [パソコン、PC プロジェクター、書画カメラ等]、以上の1)～5) について、文書化したものを絵本学会事務局宛に郵送またはメールでお届けください。

\*受理した原稿等は返却しませんので、必ず控えをとってください。

#### 5. 申し込み締切：

2014年3月28日(金) (事務局に必着)

#### 6. 発表者の決定：

研究発表は、原則として無審査とします。発表順・時間等は、4月末までにお知らせします。

### ●第17回絵本学会大会 作品発表募集要項

大会会場に会員の作品を展示し、会期中の所定の時間に出品者自らが制作趣旨を口頭で発表します。

発表日：2014年6月1日(日)

展示期間：2014年5月31日(土)午後より6月1日(日)夕刻まで

作品搬入および展示：5月30日(金)午後または5月31日(土)午前 [大会開会前まで]

作品搬出：6月1日(日)夕刻 [大会閉会后]

発表場所：刈谷市総合文化センター

\*作品展示に関わる作業は、搬入・搬出を含め、原則として発表者自身で行っていただきます。

#### 1. 発表者の資格：

絵本学会の会員で、2013年度までの会費を納入済であること。

#### 2. 発表作品：

未発表の絵本(個人制作、共同制作ともに可)。

#### 3. 発表形態：

判型・サイズ・頁数等は自由。(原画を原寸でカラーコピーしたシートの全面画と、カラーコピーなどで製本したもの1冊を展示します。)

#### 4. 申し込み要領

1) 発表者の氏名・住所・電話・FAX 番号・メールアドレス、2) 所属機関名・職業など、3) 作品タイトル、4) 原画サイズ・枚数、5) 作品概要 [200 字程度/大会プログラム用原稿] 以上の1)～5) について、文書化したものを絵本学会事務局宛に郵送またはメールでお届けください。

#### 5. 申し込み締切：

2014年3月28日(金) (事務局に必着)

#### 6. 発表者の決定：

作品発表は、原則として無審査とします。発表順・時間等は、4月末までにお知らせします。また、展示計画に関する連絡は別途、第17回絵本学会大会実行委員会が行います。

**【申し込み先】 ※ 研究発表・作品発表とも**

**〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1**

**日本女子大学児童学科 石井光恵研究室内 絵本学会事務局**

**E-mail:ehon-g@xqe.biglobe.ne.jp**

発表内容と当日の記録写真は、絵本学会 NEWS およびホームページを通じて公開されることがありますのでご了解ください。

## 第 16 回 絵 本 学 会 大 会 報 告

# シンポジウム「共に生きる 絵本にできること」

2013年6月15日(土) 静岡文化芸術大学

パネリスト 攪上久子氏 (世界のバリアフリー絵本展実行委員長)  
 古瀬敏氏 (静岡文化芸術大学教授)  
 池上重弘氏 (静岡文化芸術大学教授)  
 森俊太氏 (静岡文化芸術大学教授)  
 武田美穂氏 (絵本作家)

**司会** ただいまから、シンポジウム「共に生きる 絵本にできること」を始めます。先ほどの実行委員長のあいさつにもありましたが、本学はユニバーサルデザイン、多文化共生を理念として掲げており、その流れがあって、「ユニバーサルデザイン絵本コンクール」を2010年より4回にわたって開催しております。

本日のパネリストの攪上久子先生は、第1回目のユニバーサルデザイン絵本コンクール2010で審査委員長をお務めくださいました。攪上先生は世界のバリアフリー絵本展実行委員長としてご活躍されています。

また、絵本作家の武田美穂先生も、ユニバーサルデザイン絵本コンクール2010に特別審査委員としてご参加くださいました。まったく面識がなかったのですがお願いいたしましたところ、快くお受けいただきまして、ご多忙の中、審査委員会、表彰式と、東京から本学までお越しくださいました。ありがとうございます。

本学からは、デザイン学部空間造形学科でユニバーサルデザインの専門家である古瀬敏教授、文化政策学部国際文化学科の池上重弘教授、文化政策学部文化政策学科の森俊太教授がパネリストとして参加しております。池上先生は、多文化共生という視点で、森先生社会学の授業の中での実例などをお話くださる予定です。

まず、パネリストお一人ずつに、10～15分程度の時間でご報告をいただき、そのあと、パネリストの方の間でまた会場からのご質問、ご意見に答える形で、進行していきたいと思っております。

### 報告 1

「絵本が向ける眼差しは共に生きる社会のパロメーター」  
 攪上久子氏 (世界のバリアフリー絵本展実行委員長)

**攪上** こんにちは。攪上と申します。静岡文化芸術大学が主催しておりますユニバーサルデザイン絵本コンクールの作品は毎年見に来させていただいています。とても楽しくて、心がわくわくするような作品ばかりで、今年もコンクールがあるようなので楽しみにしています。

私は、「世界のバリアフリー絵本展」というタイトルの全国巡回絵本展を10年間実行してきました。内容は2年に1回更新していますが、今までに120カ所ぐらい全国を巡回して展示をしてまいりました。ここに展示されている図書は、子どもの本の世界のネットワーク IBBY (International Board on Books for Young People : 国際児童図書評議会) の障害児図書資料センターが、



2年に1度、世界各国からの公募を通して選考しているアウトスタンディングブック (Outstanding Book : 推薦図書) から成り立っています。

IBBY障害児図書資料センターは北欧のノルウェーで設立されましたので、北欧のノーマライゼーション理念——「ノーマライゼーション」というのは1960年代に北欧諸国から起きた社会理念の一つで、「障害があることで特別に区別されることなく社会生活を共にしていくのがノーマルな社会のあり方だ」という考え方です。それと、IBBYという団体は戦後ドイツで設立された団体ですが、人間がさまざまに心の中に引いたりする線 (border)、一番は国境だと思いますが、国境があるから戦争や紛争が起きる、それから、障害というところから考えると、障害がある、ないということで分かれてしまう。そういう、人が心の中に引いてしまうさまざまな線を、子どもの本は越えていく力がある。これが設立の大きな理念です。この北欧のノーマライゼーション理念と、IBBYの持つ、「子どもの本は線を越えていく」という理念を精神的な柱にして選書されているコレクションです。つまり、この展示会は、それらの理念が具現化されているもの、と思っています。

この10年間、実行しながらさまざまな本を見てきまして、確実に、世界の人々の工夫と知恵は、それまで絵本の鏡に映していなかった、映してこなかった子どもたちを映し出し、その窓から向ける子どもたちへの眼差しも広げてきていると実感しています。

絵本にあるバリアは、障害のある子どもたちの側にあるのではなくて、絵本の側にあると考えてきました。そのバリアを打破っていくことは、決して一度にできるものではなくて、たくさんの人たちのいろいろな葛藤と努力が、壁を壊して少しずつ織物のように新しい試みを紡いでいっているのを、この展示会に並ぶ絵本を見ながら実感してまいりました。線が引かれている世界ですので、ときには対立も起きるんですね。ユニバーサルとかデザインということは、葛藤して、止揚していく、その過程があって生まれていくものではないかなと私は絵本を見て考えています。

世界から寄せられる絵本が、数年後に影響し合っ、ミックスして先に進んでいる歩みも見てまいりました。また、この展示会の絵本は、世界各国から集められておりますので、それぞれその国の社会の状況だったり、文化の状況だったり、母語とか、さまざまな違いがある国から集められています。障害に対してのバリアを越える絵本は、そうした異文化を超える力があるのではないかということも感じてまいりました。

ほんの少しですが、展示風景を見ていただければと思います。スライドは佛教大学での展示です。次のスライドは東京学芸大学で行った展示会の様子です。展示会場も全部学生がデザインしてくださいました。

さて、皆さん、「子ども」という言葉を聞いて、皆さんの頭の中にどんな子どもたちがイメージされるのでしょうか。先日たまたま浜田佳子さんという絵本作家さんと、ほんのちょっとですがお話をした時、浜田さんがこんなことを語ってくださいました。浜田さんは、スライドに小さく画像がありますが、『ペカンの木のぼったよ』という絵本の絵を描かれています。この絵本には肢体不自由の「りんちゃん」というお子さんが出てきます。ストーリーは、青木（道代）ご夫妻という全盲の牧師ご夫妻が運営しているらしい、インクルージョン保育を実行している保育園での実話を基に作られていますが、浜田さんはりんちゃんのモデルになられたお子さんと何度もお会いしてこの絵本を制作されたと言っています。この絵本を作ったあと、浜田さんの中にもりんちゃんが住み着いてしまったので、その後、浜田さんが子どもの絵を描くときにどうしてもりんちゃんが出てきてしまうというお話をしてくださりました。

このエピソードは、共に生きている社会の大事さを物語る一つのエピソードかなと思います。日本の社会、特に学校教育は、残念ながら、障害のある子どもたちや異文化の子どもたちをインクルードしてきた社会ではありません。日本でユニバーサルな絵本をつくっていくには、もっともっと、共に生きていく社会の努力がなされなければならないといえる、と考えています。

ここで、本当にざっとですが、もっと絵本がその眼差しを向けてほしい子どもたちが実際日本にどのくらいいるのかなということをお話させていただきます。

実は、障害児数とかそういうのをカウントするのは実際にはとても難しいことです。幸か不幸か、日本はインクルードな教育ではなくて、まだ分離教育体制のほうが強いので、特別な学校に在籍している子ども数ということで皆さんにお伝えします。ですからトータルな数ではないのですが、この数から想像していただけたらいいかなと思います。大ざっぱですが、現在特別支援学校に在籍している、特別な配慮を必要とする子どもたちは、全体からすると1%に満たない数です。特別支援学校のうちちょっと細かい内訳を、これも本当に大ざっぱな数ですがお伝えいたします。視覚障害、見ることに困難がある子どもたちが約3,300人、聴覚障害が6,300人、知的障害が73,000人、肢体不自由が13,000人、病弱が2,700人、重複障害が23,000人、おおよそですが、このくらいの割合で子どもたちが今日本で暮らしております。

普通学級の中にも、字を読んだり、何かを見ることにちょっと支援を必要とする子どもたちが6.5%ぐらいいは在籍しているのではないかと、という文科省の基本調査もあります。

それから、これはあとでご報告してくださる先生のほうが詳しい内容ですが、障害ということではなく、母語や文化が違う子どもたちが日本でどのくらい暮らしているのか。外国籍で、母語が日本語でない子どもたちが28,575人、日本国籍で、母語が日本語でない子どもたちが4,895人。絵本のことを考えてみますと、母語というのはとても大事な一つの視点になりますので、母語ということでカウントをしてみました。ちなみに静岡県は、間違っなければ、日本の中で2番目にこうした子どもたちが多く暮らしている県だと伺っています。



さて、また世界のバリアフリー絵本展の展示会のお話に戻させていただきます。IBBYは、この展示会のための本を世界から公募するのに三つのカテゴリーから公募します。

一つ目は、スライドの真ん中に書いてありますように、例えば目が見えない子どもたち、聴覚障害から母語が手話の子どもたち、ページがめくりにくい子どもたち、理解がゆっくりの子どもたち、それぞれそうしたことに対する配慮を加えた本——「forの本」と呼んでいます。

そういう本だけでなく、もう一つ大きなカテゴリーに、「aboutの本」と呼んでいます。そういう子どもたちが描かれているような絵本。そういう障害について、ストーリーの中で説明するというか、そういうことへの理解を深めるための本というカテゴリーがもう一つあります。

そして、大事なカテゴリーとして、ずっと欠かせずにこのカテゴリーの中から本を見つけ出す努力をしてきている「一般絵本のカテゴリー」があります。この一般絵本のカテゴリーがとても大事だと考えます。

子どもたちは、自分たちを特別な扱いにして特別な本を与えられることよりも、普通に街の本屋さんや図書館に行ったら自分の楽しめる本があるという社会になってほしいと望んでいます。「ライトブック(Right Book)」という言葉を使ってきました。「権利として」というのもありますが、その子たちにとってふさわしいというか、正しいというか、そういうような意味も込めて、ライトブックがある社会が、共に生きる社会、ユニバーサルな社会、ノーマライゼーションが実現している社会、と言えるのではないかと考えています。先ほどの三つのカテゴリーを、ちょっと絵本を通して示してみた

と思います。ロービジョンだったり、見え方に少し特性がある子どもたちがいます。日本で、こういう子どもたちが登場するとか、そういう子どもたちが描かれている本は、実は探してみるとほとんどないのです。つい先日、11日にこの絵本が出版されました。『わたしのすてきなたびする目』作:Kostecki-Shaw, Jenny Sue 訳:美馬しょうこ 出版社:偕成社)これは、私たちの世界のバリアフリー絵本展の展示本から翻訳された本です。もちろんこの1冊で、ロービジョンだったり、見え方に特性のある子どもたちのことがすべて分かるわけでもありません。でも、一つはそういう子どもたちを理解するための絵本があります。

そして、この絵本はスイスの絵本です。([Leo deckt den Tisch] (レオのおてつだい)文:Linder, Christin Stillhart, Regula 絵:Berüter, Gabi 出版社:Edition Bentheim)どのくらい先までこの絵が見えますか。後ろのほうで見える人は手を上げていただけますか。後ろから3列目ぐらいの方でも手が上がっています。これは、見え方に特性がある子ども、少し見ることに困難さを持っている子どもたちのために——「for」の本ですね——作られた本です。中を2、3ページ見てみますと、すべて絵で描かれています(文字はありません)。かなり遠くからでも絵が見えると思います。こういう特別な配慮のある本のことを知ったうえで本屋さんや図書館で本を探してみると、こういう本を見つけます。(['どんどこどん』作:和歌山静子 出版社:福音館書店)これは日本の出版社から出ている普通の絵本です。

さっきお話ししたように、スイスで作られたような絵本と同じような要素を見いだせる本だとしても、それですべてのロービジョンの子どもたち、見え方にちょっと特性のある子どもたちにとって、すべてよいかというと、障害は多様ですので、そういうわけではないのですが、それでも普通に作られている絵本よりは、こういう本を見だしてあげることで、より自分にとって楽しめる絵本を手渡してあげることはできるのかなと思います。これは普通に売っている本です。時間が少なくなりましたので、具体的なことは明日のラウンドテーブルにつなげたいと思っています。

そうしたたくさん本を見てきて、いわゆるユニバーサルデザインの絵本とかバリアフリーになっている絵本の方向は三つくらいあるのかなと考えています。

一つは、点字や、手話や、手話にもさまざまなつけ方があります。現在はDVDが多くなっています。そして絵文字ですね。こういうような特別なものを加えていく方法。

二つ目は、表現方法を変える。それは見る絵を触る絵にするとか、におう絵にするとか、音で絵を表すとかいろいろありますが、今日は一つだけ実物を持ってきました。『あおくときいろちゃん』という皆さんもとてもよく知っている絵本です。こちらは普通の絵本です。こちらが絵の表現を触れる絵に変えてある本です。(さわる絵本[Petit-Blue et Petit-Jaune]作:レオ・レオニ 出版社:Les Doigts Qui Rêvent (フランス))あおくときいろちゃんという、見て色が違う登場人物を、触覚を変えて、レース編みではないですが、ちょっと編み方を変えたものにしてあります。あとでまだどこかでご覧になっていただけたらいいかなと思います。あおくときいろちゃんが抱き合うと緑色になるというストー

リーです。そこの部分は、あおくんの織り方ときいろちゃんの織り方がミックスされたような織り方で表現されています。こういうふうに表現を変える方向。今日、つくしんぼさんの実演がありました。つくしんぼさんも日々本当にたくさんこういう布の絵本を作ってくださいています。布の絵本も、こうした表現を変えている一つの絵本なのかなと思います。布の絵本のことだけを話してもすごくいろいろな試みがあります。

今までの、表現を変えたり、配慮を加える方向は、どちらかというと絵本がとても複雑になる感じがします。「え? こういう本もあるの? こういう絵本も絵本なの? 初めてこういう絵本を見たわ」という感想をいただくような絵本です。

もう一つ、一見地味ですが、IBBYのカテゴリーの中に、「Easy-to-Read」というカテゴリーもあります。絵本は多分、もともとユニバーサルデザインなものだと思うんですね。絵本の原点も多分いろいろあると思いますが、一つは、私はメキシコに暮らしていたことがあります。中南米の悲惨な民族の歴史を、字の分からない人たちにも伝えたいということで、絵で伝えるということがメキシコの中では社会的な文化としてすごく定着しています。立派な壁画がまちの中で見られますが、それは、文字の見えない人たちにも絵の力でいろいろなことを伝えてきています。絵本の中にも、絵でお話を補ってこういうような力があるわけで、より絵本の原点に戻ってみる。赤ちゃん絵本を思い浮かべていただくと、赤ちゃん絵本は、多分どの文化圏の赤ちゃんでも笑って見てくれたり、色もはっきり見えますと思いますし、どの世代の人にも分かりにくいということはないと思うんですね。そういうような一つシンプルさにもう一回戻していくような方向も一つあるのかなと考えています。

ラウンドテーブルでは、この辺の具体的な本、それから、日本の取り組みのことにも少し触れられたらと思っています。私の話はここで終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

司会 ありがとうございました。

## 報告2

「絵本とユニバーサルデザイン：中身と伝え方と」  
古瀬敏氏(静岡文化芸術大学教授)

古瀬 続きまして、私、古瀬から話をさせていただきます。タイトルは、「絵本とユニバーサルデザイン：中身と伝え方と」としましたが、最初に、ユニバーサルデザインとバリアフリーデザインの違いというか、似ているようで決定的に違う部分があるので、ちょっとそれをお話ししたいと思います。

ユニバーサルデザインというのは誰もが使い手であって、使えない人が出るのをおかしい、という主張です。これが一般に主張されるようになったのは、実は建築関係です。なぜかという、特に、大学もそうですが、誰でも使うことができるはずの公共建築物では、普通の人用と、例えば車いす利用者用が別というのはあり得ない。一つで全員がカバーされるべき、ということになります。端的に言えば、入口が別になっていて、特に、「車いすは裏から回ってください」というのも本来はおかしい。この大学はそういうかたちではなくて、

誰でもおしゃべりしながら、そのまま意識せずに入れるようになっていますが、そういうふうになっているべき、ということです。

ですから、バリアフリーデザインと異なって、障害があるということをごさらい立てていない。できる限りすべての人のため。実はそうなっていて当たり前のはずですが、現実はけっこう難しいというのはご存じのとおりです。少し古い建物ですと、車いすの入口は別になっている。それも相当苦勞して別になっていることがあります。

ところが、特定の利用者個人の立場からしますと、こういう公共建築物とは違った場面では、一つで全員をカバーするという戦略が最適ではないことが一般的です。例えば製品なんかですと、自分の手の大きさを操作しやすい寸法が決まってくるので、全員が同じものをあてがわれて使いやすいかどうかというと、必ずしもそうではない。本なんかもそうですし、サービスもその人に合わせてカスタマイズされたものがあつたほうがいいこともあります。ですから、one design fits for all (一つのもので全員を満足) ということではうまくいかない、ということになります。

ユニバーサルデザインを標榜して、障害者のみをターゲットにするわけではない。要するに、「すべての人のために」といってユニバーサルデザインといいましても、実質的にはそのバリアフリーデザインが前面に出て来ざるを得ない、ということもあります。

ただ、「バリアフリーデザイン」という用語を使いますと「バリアを取り除く」というわけですが、どうしても、「障害がある、それに対して利用を妨げるバリアがあつて」、あるいは、「障害を持っていることで不都合が生じて」というように、障害の存在が意識されざるを得ません。

障害の存在を意識しなければいけないというのは、実は私なんかは非常に嫌で、もともと私が研究を始めたのは、建築物の使い勝手、安全性ということです。私は団塊の世代ですが、団塊の世代が高齢期になったときに発生するに違いない不都合をあらかじめ取り除いておく、そういう不都合を建築に組み込ませない、ということから始めたものですから、私自身は障害の存在ということとは縁



のないところから研究を始めてユニバーサルデザインにたどり着いているので、ユニバーサルデザインが障害という概念を意識的に前に出していない、ということがよく分かりますが、現実には、バリアフリーデザイン、障害がある、ということを意識せざるを得ない、ということはあるわけです。

ただ、どうしてもそこところで、じゃあといって障害の有無で議論がされることになる、障害がない人は通常は直感的に「私には関係ない」と思ってしまうので、それをなんとか排除したかたち、その概念の対立がないかたちで説明ができればいいなとずっと考えているわけです。

たまたまヨーロッパでは、さっきノーマライゼーションという言葉が使われましたが、結果として当たり前になっている、当たり前に使えなければいけない、使えない人が出てはいけない、ということを経最終目標として、排除されないこと、エクスクルードされないことということで、インクルード、その人も区分線の向こう側ではなくこちら側に結果としているようになっていなければいけない、という概念が主張されていました。それを「インクルーシブデザイン (包摂デザイン)」というわけです。

私個人は、実はこの単語のほうが少なくとも「バリアフリーデザイン」よりはずっといいと思う。「ユニバーサルデザイン」という単語を使うか、あるいは「インクルーシブデザイン」を使いたいなと思います。構築環境、いわゆる built environment、建物とか都市の環境というかたちで、人間がつくった環境としての構築環境以外のもののデザインの文脈では、多分この「インクルーシブデザイン」という言葉が一番説明しやすいのではないかなと個人的には思っています。

では絵本は、ということですが、初めて本に出会う子どもから上は年齢制限なし、とずっと言われているわけですが、実際には絵本を使って何をどうやって伝えるのか。「何を」というのは中身です。「どうやって」というのは手段です。メッセージの中身ですが、「見るだけで楽しいもの」ということで絵本なのか、それとも、「伝えるメッセージ性を持っているものなのか」ということがあります。

見るだけで楽しいものというのは視覚情報に依存する割合が必然的に大きいわけです。そうすると、視覚に頼れないと楽しみは共有できないのだろうか、ということになりますから、先ほどのお話で言えば「for」、障害を持った人でも楽しめるというかたちで、例えば代替としての触覚、触る絵本、においが出る絵本、音が出る絵本もあります。基本的には、これが点字だったり、レリーフだったり、あるいは布などの素材感ということで伝えるというふうになっているわけです。これはどうしても障害ということを意識したかたちでの作られ方が主になります。

では、伝えるメッセージがある場合にはどうなのか。それは、ある意味では、理解できる年齢まで達しないとメッセージは伝わらない。少なくともそれより手前はそのメッセージが伝わらなくてもやむを得ない、ということがあります。もう一つは文化的背景。文化的背景を共有していないと、実はメッセージがきちんと伝わらないということはありません。それ以外は、伝えられればそのまま伝わる、ということですが、それを絵本という形にすることは一つの形態に過ぎないのだろうか。ほかの形があるのをたまたま絵本ということをやっているのかなというふうを考えられます。その場合には、絵で伝え切れない部分を文字に訴えるということも可能であろう。音が出る絵本とかそういうかたち、あるいは読み上げてくれるというのがあり得るかなと思います。

たまたま、われわれはこの大学でユニバーサルデザインの講義を

していますが、いわゆる多様性について、人と違っていることを説明するときにこの絵を同僚の教員が使います。これは、ディック・ブルーナ (Dick Bruna) のミッフィーちゃんの絵本シリーズの『うさこちゃんとたれみみくん』という本です。ほかのウサギの耳は全部両方びんと立っていますが、このたれみみくんだけは片耳が折れていて、要するにほかのウサギと違う。人間で言えば、形としてほかの人と違うところが見えている。これが障害であるかどうかというのは、実はよく分からない。ことによると、耳が折れたウサギは音を立体的に聞き取りにくいということが起こり得るのかもしれませんが、人間の立場から言うとあまりよく分からない。でも、形が違うということが一つのメッセージとして含まれていて、違っていても同じウサギだよということが伝わるわけです。こういうメッセージの伝え方が、非常にシンプルなことのできるのが絵本の一番いいところかなと私は思います。取りあえず以上です。(拍手)

### 報告3

「日系ブラジル人移住第2世代が托す“バトン”としてのUD絵本」  
池上重弘氏 (静岡文化芸術大学)

池上 3番目のプレゼンターであります、静岡文化芸術大学の池上重弘と申します。先ほどまでのお二人が、どちらかという概念的な話であったのに対して、私はものすごく個別具体的な、しかし、ある意味、浜松だから、私どもの静岡文化芸術大学だからできるユニバーサルデザイン絵本の使い方について、今年度、今まさに進んでいる取り組みをご紹介したいと思っております。「日系ブラジル人移住第2世代が托す“バトン”としてのUD絵本」という報告タイトルの中にある「バトン」という言葉の意味を皆さんにお伝えするのが今日の私の発表のポイントになります。

この学会は絵本学会ですので、日本に暮らす外国人の状況について必ずしも皆さんは詳しくないかもしれませんが、そこで、概略をまず把握するところから始めましょう。今から23年前の1990年に、外国の方を日本に受け入れる法律、略して入管法 (入国管理法) が改正されました。ごく大ざっぱに言うと、日系人は3世まで日本に入国できる、そして、就労に制限がないという法律の改正がありました。その結果、ブラジルやペルーなど、当時経済的に困難な状況にあった南米の国からたくさん日系人がやってまいりました。1989年に約100万人だった日本の外国人は、20年後の2009年には200万人を超えています。

このあと、リーマンショック等々がありまして、現在日本の外国籍人口は若干減少していますが、それでも200万人を超える外国人が住んでいます。その数のイメージは、日本の都道府県で言うと、長野県とか宮城県にほぼ匹敵する人口規模です。

その人たちの在留資格、つまり、どういう資格で日本に住んでいるかというのを見てみますと、実に半分近くが「永住者」であります。文字どおり日本にずっと暮らすかどうかはその人たちの判断によりますが、その気になれば日本でずっと暮らす権利を持っている人たち、これが「永住者」です。さらに、「定住者」、「日本人の配偶者等」という、比較的安定的な、日本で自由に働ける在留資格を持つ人たちが、合計して65%、つまり約3人に2人という状態です。

日本の政府は「移民を受け入れる」という言葉を決して使いませんが、実態としては、この20年間、日本は移民をかなり受け入れてきて、今その第2世代たちがこの国で育ち、もうじきどんどん社会に出て行く、そういう状況に今立ち至っております。

次に浜松の状況をご覧くださいますと、スライドの赤のグラフが外国人登録者の総数です。2008年、2009年をピークに急激に下がっている様子がお分かりいただけると思います。青のグラフで示されたブラジル人の減少が大きいこともお分かりいただけます。実は、ここ数年でブラジル人は、全国で32万人から19万人に、約13万人減少しました。けれども、残っている人たちの多くは、日本で暮らすことをかなり強く意識して残っているわけです。例えば、日本の大学で学ぶブラジル人の数はどうでしょうか。ご覧いただいているスライドの表は、私どもの大学に入ってきたブラジル籍の学生数です。最初に入学したのは2006年で、その年の入学人数は1人でした。2008年、デザイン学部にて2人。しばらく間が空きましたが、現在在籍するブラジル人学生は3年生に2人、現在の2年生に4人、そして1年生に4人となっています。これらの学生はすべて日本人学生と全く同じ入学試験を突破して入ってきております。別の言い方をすると、外国人枠があつて入ってきているわけではないわけです。

この中でも特にここ数年の動きを見てみますと、入学したブラジル人学生たちは、情報の発信にとっても熱心で、自分たちの考えを積極的に発信するようになってきました。例えば、2013年2月に行われた「はままつグローバルフェア」のあるイベントのちらしをご覧ください。6人の発表者のうち、2人が本学の学生でありますし、さらに、そのうちの一人に至っては、英語も非常によくできて、このあとイギリスにさらに留学するというような学生です。

グローバルフェアでは、そういった学生たちが、自分たちの半生を振り返り、そして、これからのことについて強い意見を述べました。本学に在籍する2人は、「同じ境遇の子たちを支えたい」ということを力強く述べたわけでありました。

しかし、子どもたち、そして保護者たちには大きな課題もあります。今見ていただいた、例えばブラジルの子どもたちは、国境を越えた移動をしております。異なる文化、生活環境で暮らしていて、将来がとても不確実です。日本で永住ビザを持っていても、経済的な状況の変化によってはブラジルに帰らなければいけないかもしれない。そういう不安の中にいます。母語でのサポートやカウンセリング、一人一人の状況の把握、そして居場所づくりや心のケアが求められています。

保護者に関しても、仕事が忙しくなかなか子どもと向き合う時間をとるのが難しいです。また、保護者の世代、つまり、移住第1世代は、ブラジルで教育を受けていますので、日本の教育制度のことをよく知りません。あるいは、給食とか遠足といったものの具体的なイメージを保護者は持っていないわけです。学校の先生方とのあいだには言葉の壁もあります。教育委員会などでは、翻訳の資料を作ったり、面談、あるいは家庭訪問、そのほかきめ細かな情報提供をしてはいますが、それはどうしても活字ベースで、少なくとも子どもたち自身が日本での学校の学びに前向きな気持ちを持つような資料はこれまで全くありませんでした。

今ご覧いただいているのは、本学を卒業し、具体的な企業名は申し上げませんが、浜松を代表する有名な輸送機器メーカーでデザイナーとして現在働いている卒業生による卒業制作の作品です。「エスコラーラ・ジャポン・イン・ハママツ」（浜松における日本の学校）と題されたこの絵本は、彼女自身が、日本の学校に編入した経験を基に、日本の学校で子どもたちがどんなことに直面するか、給食とか、家庭訪問とか、そういったものについて絵を入れて説明しているものです。

今ここでは給食の場面だけ取り上げてご紹介します。ブラジル人の児童向けに入学のガイダンス絵本として作ったのですが、とてもタッチのやわらかい絵で、これは作者の金城ジゼレさん自身が描いたものです。ポルトガル語と日本語が併記されています。持ち物の説明などもかなり丁寧に書いてあります。これを見て、子どもたち自身が日本の小学校で学ぶことが楽しみになるように、という思いを込めて作られたわけでありませう。

ところが、絵本というのは「モノ」ですから、できただけでは子どもたちの手に届かない。そこで、今年度、私どもの大学では面白いプロジェクトを進めているところです。それに先だって、ちょっと一つ紹介させていただきたいのは、「多文化子ども教育フォーラム」という機会です。これは昨年度から私どもの大学で立ち上げたもので、外国につながる子どもたちの教育に関心を持つ方々、学校の先生もOK、支援員で入っているブラジル人当事者もOK、日本語を教えている方々もOK、行政の方もOKという、いろいろな人が集まるプラットフォームとしての役割を果たしています。昨年度は4回やりました。今年度、来週6月22日に第5回を開催します。「教育支援策をめぐって当事者学生が物を申す」という、いささか挑戦的なタイトルですが、日本の教育機関で学んだ本学の外国人学生たちが、自分の経験を基に、こういうふうに教育がなされるとすごくうれしいな、という思いをまとめているところです。そこでもやはり、スライドに映っているような学生たちが熱心に議論してくれました。

回り道をしましたが、これが皆さんに今日お示ししたい一番のポイントです。今年度、私どもの大学では、「文化・芸術研究センター長特別研究」という予算の枠で、「多文化環境に生きる子どもの教育達成支援策をめぐる研究」を行っています。本日の司会を務めている林先生もそのメンバーに入ってくれています。幾つかあるプロジェクトのうち、一つが、まさにこのポルトガル語と日本語のバイリンガルUD絵本を子どもたちと家庭に届けたい、そして、届けた先に本学のブラジル人学生たちがお邪魔して、話を聞きたい、というプロジェクトです。7月までに印刷し、夏休み明けの9月から編入してくる子どもたちに配付します。また、10月には、浜松市教育委員会が新年度に小学校に入ってくる子どもたち向けの説明会を行います。そこでも配付する予定です。教員チームは学校を回って、「この絵本の反応はどうですか」ということを聞きます。

しかし、最も大事なことは家庭でのヒアリングです。学校から紹介を受けてブラジル人のご家庭に入り込んでお話を聞く。それを本学のブラジル人学生、先ほどのフォーラムで、「物申す」として意見をまとめてくれているブラジル人学生たちに回ってもらおうと思っています。つまり、本学のデザイン学部を卒業したブラジル人

卒業生が作ったバイリンガルユニバーサルデザイン絵本を、本学に現在在籍するブラジル人学生が、小学校で学ぶブラジル人の子どもたちに、いわば「思いのバトン」として届けたい、こういうプロジェクトです。

親御さんにしてみれば、日本の学校のことが分からない、不安でいっぱいです。子どもたちも新しい環境が不安です。そこに、日本の学校で学び、今、自分自身が大学生になっているブラジル人学生たちが直接赴いて、日本の学校のこと、日本の学びのこと、そして日本での将来のことについて直接話を伝える。いわば、ロールモデル（役割モデル）のデリバリーをするわけです。その、今の小学生の保護者と今の大学生をつなぐツールが、ブラジル人卒業生がつくった、このユニバーサルデザイン絵本です。こういうかたちで、思いを次の世代につなげていくようなプロジェクトを進めたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

#### 報告4

「絵本と社会学：大学授業における絵本利用の事例」

森俊太氏（静岡文化芸術大学教授）

**森** こんにちは。私は、静岡文化芸術大学文化政策学科の森と申します。今日は、「絵本と社会学：大学授業における絵本利用の事例」ということでお話しさせていただきます。私はこの大学で幾つかの授業を担当していて、「現代社会と人権」、「社会変動」という授業も担当しておりますので、主にその二つの授業でどうやって絵本を使っているかという話をしたいと思います。

絵本の特徴としては、これは一般的な話ですが、絵があることで視覚的なイメージが強いということです。あとは、やっぱり物語なので、物語性の効果というか、われわれはお話があると非常に納得するところがあります。その二つが特徴かなと思います。その二つがあるために、訴えかける力が非常に強いわけです。

その反面、訴えかける力が強いために、ステレオタイプといいますが、紋切り型のイメージを読んだ人に伝えてしまう。具体的には、ジェンダーや、(ジェンダーというのは、固定的性別役割概念といいますが、「男はこうでなくてはいけない、女はこうでなくてはいけない」と言うような考え方ですが)、あと、人種、民族についてのイメージ、つまり、「日本人はこんな感じだ」とか、「イタリア人はこんな感じだ」とか、先ほどありましたが、日系ブラジル人が浜松、静岡には多いのですが、「ラテン系のアメリカ人はこうだ」とか、そういう先入観があるわけです。そして、絵本を読むことによって、そういったステレオタイプがすり込まれやすいところがあると思います。特に絵本は子どもが読む場合が多いので、子どもにそういったステレオタイプがすり込まれてしまうと、大人になってもそれから抜け出すことが難しいといったことがあるのではないのでしょうか。

絵本と社会学の接点ということですが、先ほどの絵本の特徴を受けて、私は幾つか接点があると思ひまして、今日は次の五つの面をお話ししたいと思います。

一つは、社会学の中でも社会変化ということを題材として取り上げますが、人口が増えて都市がどんどん大きくなっていく「都市化」という一つの変化がありますし、他には「少子高齢化等」があります。

あとは、「人種や性別」、「ジェンダー」意識もあると思います。そして、中間層とか、上層階級、下層階級という「階層」。それらも社会学の重要なテーマです。

あとは、これは社会心理学的な話になるとは思いますが、「個々の自我、アイデンティティー」。最近、自己肯定感や、自尊感情が低い子どもが多いとよく言われますが、そういった「自己肯定感」、「自尊感情」も非常に重要なテーマです。

あとは、「ワーク・ライフ・バランス」。ワーク・ライフ・バランスというのは、「仕事と生活の調和」とも言えると思います。「多様化」は、「ダイバーシティ」という言い方をされる場合がありますよね。高齢化がスライドでは2回出てきますが、「高齢化」または「社会的包摂」。「社会的包摂」というのは、最初のプレゼンテーションでもありましたが、ソーシャル・インクルージョンを意味します。

最後に、「死生観」、「死別」ということも非常に重要なテーマです。こういった五つの点から話を進めていきたいなと思います。

具体的な本ですが、「都市化」というテーマで、バージニア・リー・パートン (Virginia Lee Burton) という人の『小さいおうち』という絵本は皆さんご存じだと思いますが、私も実は好きで、子どもにも読ませたり、自分でも読んだことがあります。これは都市化の典型的な本かなと思います。

数枚、私が勝手にデジカメで撮ったのですが、小さなおうちが静かな田舎の丘に建っていて、家族がいて幸せに暮らしていた。ただ、自動車を通るような道路がつくられてしまひまして、遠くのほうからおうちがどんどん増えてくる。いつの間にか、低層住宅といひますか、4階建て、5階建ての建物、アパートというかマンションというか、公団住宅というかが、どんどん増えてきて、小さなおうちはその谷間に埋まってしまう。そのうち遠くのほうに高層ビルが建ってきて、路面電車が走る。高架電車が走って、地下鉄がどんどんできてくる。最後は、高層ビルの谷間に小さなうちがあって、誰も住まなくなつて、窓も割れているし非常に悲しい状態ですが、実は、その子孫、孫の孫ぐらいの世代の人が、「これは昔先祖が住んでいたところだ」と見つけてくれて、「家もまだ丈夫なので引っ越しさせましょう」ということで、トラックに載せて引っ越しをさせるわけです。遠くのほうにまちが見えて、元の丘の上のようなところを見つけて、そこにおうちを修復して建てて、また家族が住んで幸せに暮らしたとさ、という話です。

これはある意味、都市化のプロセスを描いているわけで、都市化を如実に示している。本の著者のインタビューには、そんな意味はなかったと書いてありましたが、環境保護運動への影響といひますか、いき過ぎた都市化とか自然環境の破壊に対して、それはよくないというメッセージを発している、というところもあります。これは余計なことかもしれませんが、高架電車が走っているのは多分シカゴだと思います。シカゴはたまたまアメリカの社会学の発祥の地なので、都市化ということに対して批判的な、社会問題を扱ったものというふうにとらえられる絵本でもあります。

あとは、「人種と性」、「ジェンダーと階層」というテーマで語ることができる絵本が幾つかあると思います。一つは、ガース・ウィリアムズ (Garth Montgomery Williams) の『しろいうさぎとくろいうさぎ』という絵本があります。もう一つ紹介するのは、

リチャード・スキヤリー (Richard Scarry) の『スキヤリーおじさんのにぎやかなビジータウン』という絵本があります。

『しろいうさぎとくろいうさぎ』はこういう本です。黒いウサギと白いウサギがいて、仲良くいろいろな遊ぶ。黒いウサギが、白いウサギに、「好きなだけけれども、ずっと一緒にいられるかな」と(いって)、不安な表情を時々するんですね。あるとき、お互いに強く、好きだという気持ちを持ってごらん、といひって、そういうふうに思う。気持ちを通じ合わせて、じゃあ結婚しましようということになって、結婚すればずっとずっと一緒にいられるねというシーンです。森の動物たちに祝福されて結婚式を挙げました。というところで終わります。

もう一つ先に紹介します。『スキヤリーおじさんのにぎやかなビジータウン』という絵本は、動物がたくさん出てきて、まちのいろいろな仕事を動物がやっている。それを各ページで紹介しているという絵本です。

『しろいうさぎとくろいうさぎ』に関しては、ある意味、人種間の結婚、異文化結婚、国際結婚みたいなかたちでとらえることもできると思います。または、この絵本は子どもが生まれたところは書いてないんですね。ということで、同性結婚という解釈もできるかなと私は思っております。日本では、同性結婚は法律等的にはまだ認められておりませんが、認められる傾向が、世界的にはあるのかなと思います。つまり、いわゆる異人種、異文化ということだけでなく、セクシュアリティというか性的指向等を含む、それ以外の解釈もできるのではないかと思います。

『スキヤリーおじさんのにぎやかなビジータウン』は、批判的な解釈もあり、例えば、ブタさんがブルーカラーの労働者になっていて、ウサギは患者で、それを見ているのがライオンとか、弱肉強食の動物の世界みたいなのが職業にも表れているということで、これはちょっとけしからんというような意見もあります。(少し深読みしすぎかも知れませんが、常に、強い動物が威信の高い職業に描かれているわけでもありません。)

次は、「アイデンティティー、自己肯定感、自尊感情」ということで、事前に紹介されておりました、レオ・レオニ (Leo Lionni) の『ペツェッティーノ』という絵本があります。ご存じの方は多いと思いますが、右側にいるペツェッティーノという小さなオレンジ色が主人公です。自分はほかのキャラクターの単なる部品(パーツ)じゃないかということ非常に悩んで、ある時、自分探しの旅に出て行って、ある岩だらけの島の上でつますいて、粉々になってしまう。しかし、自分もやっぱりいろいろな部品からできている、ただ、小さくて一色のみでできているだけなんだ、ということを受納して、みんながいる島に帰って祝福されるというストーリーです。これは、自己肯定感、ありのままの自分でいいというメッセージかなと思います。

レオ・レオニさんは、皆さんもご存じだと思いますが、ネズミの本とかいろいろな本を書いていらっしゃる。大体同じようなメッセージで、自分はそのままで、ありのままの自分を受け入れることが大事だ、ということをやっていると思ひます。

それから発展させて、子どもを長い目で見守るといひますか、一人一人の個性を尊重するというメッセージもすごく強くあると思

います。そして、その一人一人の個性を受け入れたうえで、仲間との共感、協力、共助がある。そんなメッセージを持った絵本がたくさんレオ二さんによって書かれていて、教科書に載っている『スイミー』という魚の絵本も同じようなメッセージかなと思います。

「ワーク・ライフ・バランス、多様化、高齢化、社会的包摂」ということで、明日いらっしゃるとお聞きしておりますが、スズキコージさんの『やまのかいしゃ』という話と、『こどものとも』にあった「おじいさんのつるつるかぼちゃ」という話があります。

『やまのかいしゃ』という絵本は、ある意味、日本の会社のパロディーのようなものだと思います。どこかの山でのんびり、ほげたさんとほいさくさんが、それなりに頑張っているけれども、効率的に働いているという様子ではない。ただ、いろいろな人が個性を発揮して組織を活性化するという読み方もできると思いました。

『こどものとも』の「おじいさんのつるつるかぼちゃ」も、かぼちゃのつるがどんどん広がって行って、地域に住むお年寄りや病気のひととか、いわゆる「社会的に弱い立場にあると言われる人たち」と言えるかもしれませんが、その人たちをつないで、かぼちゃのスープを飲んだり、かぼちゃのケーキを食べたりして、地域社会が活性化していくみたいなメッセージを秘めた本です。

最後に、「死生観、死別」ということですが、『おじいちゃんがおばけになったわけ』という本と、有名な『100万回生きたねこ』、『葉っぱのフレディ』といった本が挙げられるかなと思います。

初めの本ですが、おじいちゃんが急に亡くなった。孫に別れを告げる余裕もなく、ぽっくり逝ってしまったのですが、亡くなった後に、おじいちゃんが孫の男の子の前に（怖くない生前の姿の）おばけになって出てくるんですね。その理由は、おじいちゃんが、「ありがとう」と言うことによってその気持ちをちゃんと孫に伝えたかったから、ということを表した絵本です。

もう一つは、ご存じだと思いますが、『100万回生きたねこ』という本です。最後に、本当に愛情を持って接することができる、愛する相手を見つけて、子ネコが生まれて、満足して亡くなりました、という本です。この本はやっぱり死生観に関してですが、近親者との死別とか、生きるとは何かとか、他人とのつながりと生きがいといったものを表していると思います。

最後に、「絵本で社会や文化を学ぶ可能性」についてですが、子ども時代の経験や記憶、感情を学生に思い出させながら、もうちょっと難しい、社会や文化についての話を学ぶことができるということで非常に効果的だと思います。

あと、絵本というのは、学びのメディアとして、絵本を通じて学んだことについて振り返らせることができる。何をどのように知り、どんな知識が、その学生の人格形成とか、世界観とか、価値観に影響したかということ、もう一度振り返って客観的に検証させることもできるので、絵本は社会や社会心理の学びのツールとして便利というか、利用価値があると思います。

あとは、学生が親や教育者になったときに、最初に述べたような、絵本の影響や使い方の特性について理解することができる、というメリットがあると思います。ということで、絵本を使って私が授業をしている具体的な事例についてお話しさせていただきました。ありがとうございました。（拍手）

**報告5**  
「創作者の立場から」  
武田美穂氏（絵本作家）

**武田** 武田です。絵本を描いています。漫画みたいな絵で絵本を描いている作家で、絵本の王道をひた走っているわけでもなく、絵本学会の理事に去年からなったのですが、そこでも多分やや異端なので、私のしゃべることは、作家の代表的意見でもなく、絵本学会の総意でもないです。

今、すごく素敵なお話をいっぱい聞いて、UD、バリアフリーということも、2010年にユニバーサルデザインコンテストがありまして、、、。審査員の1人に加えていただいたときに初めて知りました。自分の頭の中にある絵本のカテゴリーと全く違うようなものが出てきて、、、。自分は紙をとじて本の形になったものが基本的に絵本だと思っていたので、いろいろびっくりして、刺激を受けたり、本当にこれは絵本の中に入るのだろうかとか思って、いろいろ今でも思い続けています。そんな感じで、作家の立場でお話をさせていただきます。

まず、自作の絵本を読ませていただきますね。たくさんしゃべるのが嫌なので絵本を読んで時間をとる？なーんて。すみません（笑）。絵本は、自分にとって、「めくる」ということがものすごく大事で、本当はスライドにすればいいのですが、あえてアナクロイ機械を用意していただいて、めくりながら本を読ませていただきます。

まずは、私が絵本作家としてご飯が食べられるようになった、『となりのせきのますだくん』を読みます。これは今回パンフレットのイメージキャラクターに採用していただいたので、それもちょっとうれしかったのと、あと、さっきの国境を越えた本の話がありましたが、これはフランス版にもなっています。日本版はこうやって（右開き）めくっていきますが、フランス版は（左開き）こんな感じ。表紙の色は、フランスは「バックは紫でいく」と言われて、「絶対嫌だ」みたいな、いろいろな紆余曲折があったのですが、なんとかできあがり、ほっとしてます。では、「ますだくん」を読ませていただきます。

『**となりのせきのますだくん**』

あたし、今日、学校へ行けない気がする。だって、頭が痛い気がする。おなかが痛い気がする。熱があるような気がする。頭が痛くなればいいのに。おなかが痛くなればいいのに。熱が出ればいいのに。

ガチャ。公園へ遊びに行っちゃおうかな。「先生、みほちゃんがする休みしま〜す」。

隣の席のますだくんは、机に線を書いて、「ここから出たらぶつぞ」ってにらむの。消しゴムのかすがはみ出したら、いすをけるの。

あたし、算数が嫌いな。2+1は右手だけでできるけど、9+3は両手を使っても難しい。「10+11はどうするんだよ」って、ますだくんが笑うの。「先生、みほちゃんは手を使ってま〜す」。

あたし、給食のシチューの赤いニンジンが嫌なの。鶏肉も嫌い

なの。でも、こっそり残すと、ますだくんが大きな声で、「いけないだ〜」っていうの。「また残してる」。

あたし、体育の時間も苦手。縄跳びが苦手。かけっこが苦手。それなのに、ますだくんは得意。「へたくそ、へたくそ、へたくそ。どうしてもっていうなら教えてやってもいいぜ」、「いい、いじめるから」、「へたくそのくせにえばんなよなあ」。ゴン。

きのう、帰りの時間にけんかした。お誕生日にもらった、いいにおいのするピンクの鉛筆、気に入っていたのに、ますだくん折っちゃった。消しゴム投げたらびっくりしてた。それからいらんてた。あわてて帰ったけど、今日学校へ行ったら、あたし、ぶたれるんだ。やだなあ。やだな、やだな、やだなあ。

ギー。「おっはよう〜」、「あれ〜、ますだくん、そんなとこで何してるの?」、「別に」、ギー。ドキ。ギー。ドキドキ。ギー。ドキドキ。ギ、ギ、ギ、ドキドキ。ギ、ギ、ギ、ギ、ギー。「おい、ごめんよ」と言って、ますだくんがぶった。「帰りに足し算教えてやるっか」、「いい、いじめるから」。

特に障害があるとかいうことではないのですが、学校に行くのにやっぱりハードルの高い子どもたちがいっぱいいます。私もこのみほちゃんみたいに何もできない子だったので、すべてにおいて学校自体ハードルが高かったです。そういう意味では、さっき絵本の中にはもともとバリアフリー、UDの要素はあると言われましたが、それにすごく共感しました。

次は、わたし自慢の意味なし絵本。こんな絵本でもいいのか？みたいな、、、。

『**ありんこぐんだん** わはははははははは

』。ナンセンスというか、もっとふざけたものですが、子どもの、調子に乗りたい!という特性に乗っかりたいと、作りました。次々次々、エスカレーター式に調子に乗って行って、「うそー」「わあ、ありえねえ」って言われたくて作った本です。そういう意味の「for」ですね。

『**ありんこぐんだん** わはははははははは

』

ありんこぐんだん わはははははははは。お砂糖こぼしちゃいけないよ。一粒だっていけないよ。なぜなら、なぜなら、どこからともなく、わはははははははは。ぞろぞろ、ほらほら、ぞろぞろ、ぞろぞろ。ぞろぞろ、ほらほら。ほろほら、ぞろぞろ。ありんこぐんだんやってくる。わはははははははは。野を越え、山越え、丘を越え、どこからともなくやってくる、ありんこぐんだんやってくる。お塩じゃ? だめだめ。こしょうじゃ? だめだめ。お砂糖こぼしたそのときに、やつらはかぎつけやってくる。どこにだってやってくる。ジャングルジムのてっぺんも、お風呂の中も、押し入れも、やつらはたちまちかぎつける。プリン。無人島にだってやってくる。助けて〜。お砂糖。きよろ、きよろ、にやり。

5、4、3、2、1、0、バシューーン。ピコン、ピコン。ピコン、ピコン。ピコン、ピコン。「こちら、宇宙飛行士けんたです。順調に月の周りを回っています。どうぞ」。

「了解」。ピー。「ただいまからおやつ時間なので、ちょっとお休みします。どうぞ」。

「了解」。ピー。おやつ袋、ぼろ、ざっ。

わはははははははは。月だって、火星だって、どこだって、宇宙の果てまでやってくる。ありんこぐんだんやってくる、それからお砂糖をすっかりかき集め、頭の上に担いたら、ぞろぞろ、ほらほら。ぞろぞろ、ぞろぞろ、どこへともなく去っていく。お砂糖探して去っていく。わはははははははは。

僕のおやつ。おしまいです。（拍手）

さて、もう一つは、「for」の格好をしたナンセンス絵本です。「食育絵本」というふりして人を釣りつつ、中では自分でナンセンスとめくりをやってみた。あと、ちょっと音楽的な掛け声みたいなのをやりたくて作りました。『**オムライス・ヘイ!**』。

本は、電子書籍とかと違うのは、こういうところ（見返し）とか、こういうところ(そで)とかに遊びができるのがいいですよ。あっこれ、すみません（見返し裏にサインの書き損じがちらり）サイン本の書き損じ、捨てがたくて使ってます。

『**オムライス・ヘイ!**』

オムライス、ヘイ、材料だ。まずは中身だ、ケチャップごはん。タマネギだ、ヘイ、鶏肉だ。炒めるぞ、へ、ヘイ。さあ、ごはん、おっと忘れたグリーンピース。にゆる、にゆる、にゆる、にゆる、ケチャップだ。いい色だ、ヘイ。次は卵だ、1人に二つ。ぐるぐるだ、ヘイ。卵を入れるぞ、じゅうじゅうだ。ここが肝心、さあ行くぞ。半熟だ。ごはんを入れるぞ、勝負だぞ。緊張だ。くるり。成功だ、ヘイ、天才だ。お皿に入れるぞ、さあいくぞ。集中だ。天才だ。ケチャップで星、オムライス・ヘイ、大成功。おしまいです。（拍手）

ありがとうございます。きちんとお話しするのが苦手、すみません。ますだくんに出てきたみほちゃんと同じように、本当に私はいろいろなことができなくて、ちいさなころからコンプレックスのかたまりでした。でも、そういうコンプレックスが、絵本を描くにあたって、すごいネタ? 基盤? 動機付け? になっているので、過去のコンプレックスにご飯を食べさせてもらってるような? (笑) コンプレックスも使いようだよ、財産だよ、と、そういう話を子どもたちにすると、「ぼくもいっぱい持ってる!」「わたしも!」とかって、お互い共感し合ったりします。(笑)

先ほどまでのお話とがらっと変わってしまったのですが、今日は、総括的に本の話をするということで、絵本というものを自分なりに考えると――私は、今みたいに、リズムとか、めくりとか、そういう感じのものを大切に本をつくっています。

もともとアニメや映画にもとても影響を受けていますし、そっちでもよかったのではないかとかよく言われますが、やっぱりものとしての絵本、さっき言ったように、表紙があったり、手触りがあったり、背があったり、紙の質感、そんなもので、読んでいるうちに自分の癖がついたりしたときに、とても大事な友達みたいになっっていく、そういう、ものとしての絵本に対して非常に愛情があるんです。

もちろん、例えば今、電子書籍がいろいろ台頭してきて、今は文章が多いのですが、そのうち、きっと絵本みたいなものも出るであろうと思います。使い勝手がいいというか、利便性、それから、

拡大できたりするから、いろいろなものではバリアフリー絵本に通じるような役割もきつと果たしていくであろう、と。

ですが、機械に映されるということで、物体としての絵本の、背はどうしよう、見返しは、そでは？みたいな、そういう楽しさで作っている本とはまた別になってしまう。それは自分にとって重大な違いです。

めくるというのは、映像と比べても——あっ、うちは父が映像の作家で、監督をしたり、プロデューサーをしたりしていたので、実は映像一家なんですけど。絵本と映像の違い。自分が絵本を最初に素晴らしいと感じたのは、子どもの頃じゃなく 23 - 24 くらい、大人になってからです。次々とくり上げられる場面とか台詞を、映像の場合は「享受」するのに対して、絵本は自分の時間、リズムでめくっていく。私はさきほど、作家としてこういうリズムで作っているという感じで本を読みましたが、読者のかたはもっと違った、それぞれのリズムや時間で読んでくださればいい。

以前、大阪のかなり関西弁が入っている「ますだくん」や、山口の 70 歳ぐらいの読み手のコアな山口弁の「ますだくん」を聞いて、非常に目からうろこが落ちて、そのときに、「本というものは、自分はこうやって作れるけれども、手に取ったときから読み手のものになる」ということを非常に感じました。そういう、一方的なものではないという面白さが本にはある。今、皆さんがいろいろ読書運動で読み聞かせをしていますが、どんなふう自分の本がバリエーションをつけてもらえるか、こっそり見に行くのがすごく楽しみです。

あるいは、今、読書教育の中で、子どもがわに読みかせさせたら楽しいのではないかと。自分の中へ一回取り込んだものを、自分なりのものにして人に伝えることができる。絵本はそういう非常に柔軟な媒体だと思っています。

さっき手話の方とお話をしたのですが、「絵本」は、手話ではこの組み合わせで表すそうです。「絵」、「本」、「描く」、(描いたものを)「開く」、ということで「絵本」。絵本の基本的な姿が表現されています。安曇野ちひろ美術館に行くと、巻物からずっと連綿と続いてきた絵と文章の組み合わせたものとか見ることができます。江戸時代あたりになると、とじた絵本が出てきて、あっいまと変わらない！と、感激。時代考証が違っていたらすみません。確かめるためには安曇野ちひろ美術館に行ってみてください(笑)。

話が戻って、さっきのユニバーサルデザイン絵本コンクール・2010 年に参加させていただき、いろいろ驚きがありました。今日、装演してくださったかぐや姫のお話をそのときにはじめて見ましたが、これを絵本と言っていいものかということは疑問に思いつつ、本当に面白いアプローチだな！と思いました。今回の応募先品は低い年齢やアマチュアのかたの素敵な作品を見させていただきましたが、2010 年は自分たちが装演しながら全国を回っている、その道ではプロと言うのでしょうか、そういう人たちの作品の創意工夫がすごく面白かったです。

私は、オノマトベといわれるいろいろな擬音とか、そういうものがすごく好きです。例えば UD 絵本の中で、さっき先生がおっしゃった触る絵本は、めくっていったときに、ざらざら感とか、「おっ」という感じがあります。これは、私がめくったときに擬音で「ざっ」とやるような、ああいう役目も担っていたりして、なるほどと思いました。

あと、僭越ですが、、ロービジョン。私の絵は線とはっきりした色なので、ロービジョン用の本が自分にもできるのかなという気持ちになったりもしています。今後、UD 絵本とかいうのが絵本としてもっと認知されるためには、プロの人たちが入っていったほうがいいかなと。絵本はいろいろなカテゴリーとかあって、きつと自分の絵本はこら辺に入るのかな、入れてもらえないかなとか思いながら、さっきお話を聞いていました。

ただ、自分的には、人に伝えるということはエンターテインメントしなければいけない、これは最低の基本であると思ってます。いままだ特殊な絵本は選択肢が少ないです。読者はもっとたくさんの幅がある中で選ばせてあげたい。選ばれるように作り手はもっとエンターテインメントする。しのぎをけする。いいものを作る。ですが今日、いろいろなバリアフリー絵本、UD 絵本を見て、マーケットにのせるのはなかなか大変だと感じました。製作費の問題です。日本の政府はつまらないところにお金を使わず、こういうところこそお金を出し、バックアップしなくてはいけないと切に思います。

私は以前、絵本学会に入る前に、講演をさせていただいたことがあるのですが、そのときにコーディネートしてくださった広松由希子さんが、打ち合わせの時に私が「エンターテインメント」と馬鹿の一つ覚えみたいに言うことを面白がってくださって。講演の中で「武田さん、わたし辞書ひいてきました！」と。「『エンターテイン (Entertain)』という言葉があるんです。武田さんがよくエンターテインメントと言うけれども、「エンターテイン」というのはそもそも「もてなし」という意味。だから、武田さんは、やっぱり作り手側としてこどもたちをもてなしたいんですね。そういう気持ちって素敵ですよ。」ということを言ってくださいました。私は、それをすごくすごく大事にこころの中に抱えて、事あるごとにエンターテインでいこうと思いつながら本を作っています。ちょっと UD から離れてしまいましたが、作り手としての本の話を見せていただきました。ありがとうございます。(拍手)

**司会** ありがとうございます。

#### 質疑応答・意見交換

**司会** では、パネリストの方に壇上にお戻りいただいて、会場からパネリストの方に何かおたずねになりたいことや、あるいはご意見等があればそれを伺いまして、最後にパネリストお一人ずつからまとめをお話しいただきたいと思います。

**竹内** 横浜のフェリス女学院大学から来ました竹内と申します。池上先生のブラジル人学生のお話を大変興味深く拝聴しました。視点としてとても面白かったのですが、私は、そのプロジェクト自身——ブラジルの子どもたちのパトンということもすごく大事だと思いますが、そういうことが日本人学生に対してどういう影響を与えていくかというのもすごく大事ではないかなと思うんですね。ブラジル人卒業生や大学生の取り組みは、先生のゼミをはじめ日本人学生たちの、共生とか、そういうことに対する意識をどのように変えていったか、そこら辺をお話しいただけたらと思います。



**池上** ご質問ありがとうございました。とてもよい質問をいただいたことをうれしく思います。今日ご紹介したのは、今年度やっているプロジェクトの一部でありまして、実はほかにも、今年 10 月にある展示のプロジェクト(多文化共生に関連したコンテンツにポルトガル語と日本語のバイリンガルで説明を加えた展示会)を行います。その実行委員長はやはり日系ブラジル人の学生です。そこには日本人の学生も多々入っています。

また、私が持っている「多文化共生論」という授業の中で、彼女らがかままつグローバルフェアで話した 15 分ほどの映像を見せます。学生たちの反応——授業の最後に書いてもらうペーパーは、「非常に感動した」というメッセージで満ちあふれていましたし、中には、実際にその場で感動の涙を流した学生もいました。私がおの翌週、学生たちに、こんな感想があったよと紹介したうちの 1 枚は、日本人のある学生の紙です。「彼女らの決意が胸に響きました。でも、同時に思った、負けられないぞ」と書いてあるんですね。

それをフィードバックして共有することで、普段はにこにこ笑っている仲間たちが、大変な苦勞をして今ここにいる、ということをお互いに共有します。共有するだけで終わらずに、私どもの大学ではさらに、同じ仲間として展示のプロジェクトに加わるとか、学生支援のプロジェクトに加わるとか、そういう仕組みを幾つも持っています。それが相互に連携し合いながら、本学は、浜松にある公立大学の地域貢献の一つとして、多文化共生の取り組みを進めている、ということになっております。

**司会** ほかに何かご質問、ご意見があれば挙手願います。

**林** 京都造形芸術大学の林絵美という者です。武田美穂さんに質問させていただきたいのですが、先ほど、エンターテイン(もてなす)を意識して制作しているとお話されていましたが、もてなすということをお互いどのように意識されて制作されているのかをお聞きしたいです。

**武田** ありがとうございます。「もてなす」と言ってしまうのですが、例えば作家は、書いているうちに、ターゲット年齢を意外とみんな持っています。大人の本は大人の本としてありますが、子どもの本の場合は、意外と細分化されていて、12 歳ぐらいの人にあてて書くのが好きな人とか、なんかそれがある。私なんかは、もっと小さいかたたち。すべての人たちが見られる絵本を最初から目指しているという方もいますが、私はどうしても子どもに向けて発信をしています。

ただ、その発信は、「子どもに向けて」といっても、70 歳の人も心の中に 7 歳と 8 歳を持っているのです。そこら辺に呼応したいなと思っています。だから、自分の中の 7 歳、8 歳が、皆さんの中にいる 7 歳、8 歳にどう呼応して、どう面白がってもらえるかとか、なんかそういうようなことをすごく考えながらやっています。

私は絵本作家になる前に図書館でアルバイトをしていて、ある日、『よあけ』という本の読み聞かせをさせられました。それが淡々とした暗い映像で、朝になると突然緑の画面になる。そのときに、すごいめくる映像技術に感激して、「私、これ絶対やる」と思いました。今、自分で何を言おうとしているのか分からなくなってしまいました(笑)。すみません。皆さんをもてなそうと思って、めくりをやると思っています。あとでちゃんと話がまとまったら言いに行きます。すみません。

**林** ありがとうございます。

**瀬戸口** こんにちは、九州産業大学の瀬戸口信悟といたします。さっきちょっとデジタル絵本の話が出ました。バリアフリーとかUI絵本の話も出ました。僕もデジタル絵本のことを考えることがあって、デジタル絵本についての可能性を皆さんに聞きたい。どういう可能性がデジタル絵本に見られるか。

僕の意見としては、本を読んだのですが、難聴の障害を持った両親から生まれた五体満足の健康な子が、絵本の読み聞かせとか足りなくて、コミュニケーション能力が低く、閉鎖的な性格になってしまった。そういうのは、デジタル絵本とかで、声も出るし改善されるのではないかなという可能性が僕には見られて、バリアフリー絵本とか、ユニバーサルデザイン絵本とかにおいて、とてもいいのではないかなという考えを持っています。何かそれについてどういうお考えをお持ちなのか。

**司会** 今回の大きなテーマになると思います。攪上先生からお一人ずつ簡単に、こういう可能性があるのではないか、あるいは、こういう問題もあるのではないかということ、今、お考えになっていることで結構ですのでお話しただけいいでしょうか。

**攪上** 私がかかわっている分野でも、電子絵本というか、ITを使った絵本の進出がすごくあって、ユニバーサルデザイン性はやはりすごくあると思っています。特に、視覚的なもので情報が得られないような障害というか、そういうような人たちにとっては情報障害も起きますので、そういうものに対しては非常に力があると考えています。絵本に関しては、障害にマルチに対応する絵本として、マルチメディアデザインという取り組みが今あります。

私の中では、電子絵本というのは、まだまだどうなっていくのか整理がついていないところもあります。情報を届けるという点でのユニバーサルデザイン性はすごくあると思いますが、武田先生がしきりに皆さんに訴えていた、絵本が持つ、人との関係を紡いでいくような面とか、ものと触れていくような、もっと五感全体に訴えてくるようなものの中にあるものは、電子絵本の中ではどういうふうになっていくのかというのは、まだちょっと自分の中でも整理し切れないでいますが、ユニバーサルデザイン性という一つの方向としては、非常に力を発揮していくということはあるかなと考えています。

**古瀬** テキストなり絵が、データとして使われているかたちに取りあえず収納されている。それを受け取る側が自分の使える能力に応じて取り出すことは、可能性としてはある。普通に印刷された絵本であれば、視覚的に情報をとれない場合は困難、というのがあるわけですが、インターフェースをうまくつくればそれを乗り越えられるであろう。現在は、インターフェース——情報を与えるというかたちは、完全にほかの手段としてはまだできてないと思いますが、多様なものももっと出てくれば、今まで以上に楽しめる、楽しめなかった人がもっとずっと減ることになるということだけは言えます。具体的にどういうふうに展開するかというのは、私はそういう

技術を開発している立場ではないので分かりませんが、データが使えるようになっていくということは非常に有望な段階だ、というふうには申し上げられます。

**池上** 私自身は、絵本という媒体を通じて、生身の人間同士が対峙する、つまり一つの時間と空間を過ごすことがとても大事であろうという考え方を持っています。ですから、デジタル絵本で、今おっしゃられたことを、例えば生身の人間が何らかのサポートをする仕組みをつくることも重要ではないか、というのが考え方の大前提になります。そのうえで、デジタル化することのメリットを、今日の私の発表との兼ね合いで多言語化という観点からちょっと考えてみたいと思います。

浜松市では、さまざまな外国人に向けて多言語情報を発信してまして、その中には、カナル・ハママツ——カナルというのは水路ですあるいはチャンネルという意味です——という動画サイトも含めた多言語情報の提供があります。ユーチューブにリンクが張ってあって、例えば中国語の説明で見ることができるし、ポルトガル語での説明もあります。映像は全く同じですが、言語が違うものをかぶせてあります。

例えば、同じ絵本に対して、中国語を選ぶと中国語の音声が出てくる。ポルトガル語であればポルトガル語、そういう対応がデジタル化は非常にやりやすいのかなと、お聞きしながら思いました。直接の回答ではないですが、関連した情報としてお伝えした次第です。

**森** 私も直接デジタル化というのはよく分からないのですが、IT技術と絵本に関しては、私は単身赴任みたいなことをしていたことがあります——小さい子どもが日本にいて、私は仕事でほかの国ということがあったのですが、その時、私が絵本を読んだのをカメラで写して、ユーチューブにのせて、とか、動画をファイルにして、それを子どもに送って、子どもは私が絵本を読んでいるのを見られる、というようなことで使いました。そういう意味では、デジタル絵本ではないですが、テクノロジーを利用して、遠い距離でも親子のコミュニケーションを保つ、という工夫はしたことがあります。

**武田** デジタル絵本、でも、分けて考えればいい。デジタル絵本にできること、普通の本にできること、それを組み合わせることができる。共存共栄みたいなことが望ましいと思います。

ただ、本でも、デジタルでも、何でも、読んだ人が面白くなかったら、本を読むことを嫌いになってしまったらいけない。だから、そこら辺は、本当に頑張って、頑張って、いいものをいっぱい作っていかなくてはいけないなとすごく思います。

それから、さっきの続きですが、図書館にかぎっ子がいっぱいいて、4年生の女の子がその主でした。私のところに、「本、読め」と持ってくる。「感情がこもってない」とか、「へたくそ」とか言われながらいつも本を読んでいました。

で、新刊が来て、読めと言われて読んで、何ページかで、つまらないと「もういいよ」と書架に返しに行ってしまうのです。大きな責任を感じたりしました。「あの本はいいのに私の読み方が」とか。

あらゆる意味で、本を子どもたちに伝えようという人たちは本当に頑張らなければいけない。いまだにその子の顔が目に見えなくて、「閉じられない絵本を作りたい」みたいな、さっきのはそういう話でした。すみません。

**司会** ありがとうございます。まだまだ皆さんお感じになっていること、お聞きになりたいことがあると思いますが、時間がまいりました。明日のラウンドテーブルでは、「ユニバーサルデザイン絵本」ということで、攪上先生と武田美穂先生においでいただきます。また、「ものとしての絵本」ということで、京都造形芸術大学の佐藤先生のコーディネートのもと、アーティストの藤本由紀夫さん、そして、本学のデザイン学部生産造形学科の佐井国夫教授が話題提供者として入りますので、ぜひ今日の話を発展させていただければと思います。

最後に一言ずつ、パネリストの方から、何か本日の感想等をお聞かせいただいで終わりにしたいと思います。

**攪上** 今日はありがとうございました。いろいろなお話を聞いて、自分の中でいっぱいいっぱいですが、絵本が向ける眼差しの中に自分が入っている、そういうことが人に与える力というか、共に生きていくことのうれしさが、絵本を通してもっともっと広がっていくといいかなと改めて思いました。

**古瀬** 私の専門は建築、まちづくり、ユニバーサルデザインですが、まちづくりの絵本はけっこう前から作られていますが、ユニバーサルデザインの中身をメッセージとして伝えるの的に確な絵本は、まだ十分に世の中に出回っているとは言えない状況なので、なんとかそれをしたいなとちょっとは考えつつ、でもいまだに手がついてない、なんとかしようとの場で考えました。

**池上** 私は、先ほどいただいた質問のあと少し考えたことを、補足的に語って終わりにしたいと思います。今日、私の発表では、本学のブラジル学生が卒業制作で作ったバイリンガル絵本が、思いのバトンとして使えるのではないかという話をしました。ブラジル人の小学生やその保護者にとってみれば、そのバトンを持って自分の家にやってくる大学生たちはまさに大学進学を果たしたロールモデルであり、そのロールモデルに直接接する機会になるというメリットがあります。

そして、当事者の外国人学生たちにとってみれば、自分たちの持って生まれた境遇は、決してこの国で生きるうえでのデメリットではなくて、いろいろな人たちをつないでいくことのできる資質なのだという認識を持つ、いわばエンパワーメントの機会になるのではないかと、という考えを持っています。

日本人の学生や日本の社会にとってみれば、今、日本の社会では、移住第2世代という新しい人たちがどんどん高等教育を受けて社会にはばたこうとしている、そういう状況だということを知ってもらう機会になるだろうと思っています。

1冊の絵本ができることは小さいですが、今申し上げたような大きな認識の変革につながるような、そういうきっかけになっていけ

ば素晴らしいなと思って本日の私の発表とさせていただきます。ありがとうございました。

**森** ちょっとあえて挑戦的なことを言わせてもらおうと、私も絵本は大好きで、子どもにも読んで聞かせたりします。絵本に限らず、本は非常に重要なことだと思うんですね。ただ、そういうものだからこそ、絵本は必ず好きにならなくてはいけないとか、絵本が嫌いな、または本が嫌いな子どもは駄目だみたいな、そういうふうになんともなく思ってしまうような傾向があるような気がするんですね。

本は重要ですが、嫌いな子もいる。嫌いだからといって別に悪いわけではない。絵本学会は絵本が好きな人がたくさん集まる会ですが、嫌いでいいんだということ、ちょっと心の片隅に置いていただければなと思います。

デジタル化が、本が嫌いな子、彼ら、彼女らが好きになるような、何かそういう役割を果たしてくれるといいのかなと思います。

**武田** 今のはすごくいい意見だと思います。私には弟がいて、全然本を読まなかったのですが、今、私よりもずっと立派な社会人になっているので、別に本を読まなくても全然かまわなかなとか思います。

本当は、今日、私はいろいろ質問を振ったりして橋渡しの役をするつもりでした。今日は、(皆さん)魅力的で面白いお話でしたが、難しいことも多く、質問ができなくて、橋渡しができずにすみませんでした。

ラウンドテーブルでは、すごく身近な感じで皆さんとお話をしたいと思いますので、できれば明日ご参加くださいますよう、よろしく願いいたします。

**司会** まだまだ皆さんお聞きになりたいこともあると思いますが、このあとの予定もありますので、申し訳ありません、ここでシンポジウムを終了させていただきます。

なお、このあと、部屋を出たところで武田美穂先生の絵本の販売等、サイン会を行いますので、ぜひお越しください。

最後にちょっとだけ宣伝させていただきますと、ユニバーサルデザイン絵本コンクールは今年度も行います。皆さんのお手元の袋の中に絵本コンクールのちらしが入っているかと思います。9月30日締め切りですので、ぜひご応募いただきますようお願いいたします。では、長いあいだ、ありがとうございました。(拍手)

[文責 林 左和子]

## 2012年度絵本フォーラム報告

### 「スズキコージ解体！」

【ゲスト】

スズキコージさん 松本猛さん（第1部・第2部）

小野明さん 澤田精一さん 筒井大介さん 土井章史さん（第2部）

【主催】

絵本学会企画委員会（武田美穂／原島恵／今田由香）

【日時：会場】

2012年12月22日（土） 東京都 日本女子大学 新泉山館

#### 第1部

##### アカデミックとアカデルミック

**松本**：今日はみなさん、よくお集まりくださいました。ありがとうございます。絵本学会の松本と申します。マヤ暦では昨日で暦が終わって、今日から新しい世界が始まるそうです。絵本学会も、今日から新しいイメージに変わっていきたくらいと思います。変わるには何が一番良いかと考えて、やはりコージさんだろうということになりました。今日はコージさんをゲストに招いて、解体しようということで、始まります。

コージさん、よくいらっしやいました。今日はよろしくお願ひします。

**スズキコージ**：はい。みなさん、今日は雨降りの中、ありがとう。こんにちば。

**松本**：今日は「スズキコージ解体！」なんですが、解体した後どうやって組み立てるかというのが、大変なんです。打ち合わせをしていないんですけど、まずどこから解体をしようか、ということを考えて。ここは何しろ絵本学会ですから、アカデミックで。

**スズキコージ**：あの「アカデミック」ってこちらが言うと、僕は「アカデルミック」ってね、垢が出る方で。実際にあの、スズキコージズキンの「アカデルミック展」ってね。今まで東京で何回か、そういう展覧会をやりましたけど。まあ垢がでる。

**松本**：その「アカデルミック」を、どうやって「アカデミック」に解体するか、というのが今日の課題ですね。スズキコージという人間がどのように構成されてきたのかを分析する。これが常道のひとつです。もうひとつは作品。作品を見て、それを分析していく。常識が通用するかしないかは、ちょっとわかりませんが。まずは、そこからいこうかなと思います。『スズキコージズキンの大魔法画集』のインタビューに書いていないことから。

##### スズキコージ誕生

**松本**：何でコージさんが、この世に誕生してきたんですか。

**スズキコージ**：ふふえふえ？

**松本**：どんなお父さんとお母さんの間に、生まれたのでしょうか。その辺を教えてください。



**スズキコージ**：あー、ん、まあ、僕は生まれが静岡県の浜北市、現在の浜松市浜北区なんですけど、まあ、そこで生まれました。なんと僕の親父が94歳、母親が90歳。ふたりとも現役でいます。浜松の奥地。その奥は天竜二俣なんて言いまして、秋野不矩さんがお生まれになったところで。それで、僕の親父が大正何年かの生まれで、今は94歳で、もう全盲です。もう目が見えなくてこんな、スティヴィー・ワンダーみたいに、こんなふうになってますけど。

**松本**：大正6年？

**スズキコージ**：ですかね、94歳。太田大八さんとほとんど年が一緒じゃないかと。

**松本**：うちのおふくろと一緒にだと思いますよ。

**スズキコージ**：あと、やなせたかしさんとかね。同じ年だと思ひます。それで僕の親父が、小さい頃、天竜二俣の尋常小学校の頃、秋野不矩さんに絵を教わったことがある。この前思い出した、とかって言っていましたからね。

**松本**：へえ。

**スズキコージ**：で、なんとあの、僕のおじいちゃんの兄弟かなんか、鈴木鹿之介っていう放浪の絵描きさんがいたっていうことが、数年前にわかったんですけど。その人は、まあ放浪だから、たまに帰ってはきたんですけど、天竜二俣にね。俺の親父は絵を見てたと。で、どんな絵かといっても…。絵を説明するということは、すごく難しいこと。絵も、何も残ってない。

**松本**：残っていない？

**スズキコージ**：残っていない。僕は見たい。で、ある日、また「いってきます」って言ったまま、帰ってこなかったっていう。鈴木鹿之介という人は、僕のひいおじさんっていうんですかね。なんて言ったらいいのかな。明治の人です、きつとね。

だからもし皆さん、日本全国あちこちに行って、ぼろぼろの古い旅館なんかで「鈴木鹿之介」なんて書いてあったら、ぜひ連絡ください。僕が見たいです。

**松本**：「しか」は…動物の鹿ですか？

**スズキコージ**：はい、鹿です。僕のもう亡くなった、天竜川の船頭、筏流しの、背中に天竜下り刺青とかしていたおじいちゃんが、鈴木森太郎っていう名前。僕の盲目の親父が鈴木力男っていう、力の男っていう、すごいみんな、なんか力の、気合の入った名前なんですけど。

**松本**：お父さんも昔は、絵を描いていたんですか。

**スズキコージ**：そうなんだよね。僕の親父は、結局赤紙がきたんで、まあ中国の侵略戦争にね、連れていかれて。それで、まあ、なんとか命だけはあって。それで帰ってきて。

僕が小学校1年生のときなんか、親父も絵を描いててね。結構真面目な丁寧な絵でね。僕が絵を描いてると…気に入らないとき、僕の絵を見て目の前で破っちゃったり。そういう過激な親父なんです。絵心はあったな。

**松本**：お母さんは？

**スズキコージ**：母親は…おっかさんは、書の方ですね。おっかさんの親父は、名古屋駅の副総裁やった。それで、日中戦争が始まって、家族…母親の家族全員、北京の隣の張家口という、万里の長城が始まるあたりの官舎に引っ越して。その辺はまだ、暮らしぶりが良かったらしいのね。女中さんがいたっていうからね。で、どんどん日本はもうダメになって、敗戦になっていくんですけども。

駅長さんやってたおじいちゃんが、書が得意で、もうすってんでんになって日本に戻ってきてから、表札書きの仕事やってたという話は、聞いたことがありますから。母親はそれ受け継いで、いまだに書道ですね。書いてます。

**松本**：じゃあ家には、もともと画材だったり筆だったりっていうのは、あったんですか？

**スズキコージ**：そういうものは、なかったですね。親父もね、まあたまに気が向けば…ちょっとセクシーな河童描いて。そういうような感じの…ちょっと水墨画を楽しむ。母親はちょっと何ですかね。母親の方がもっと本格的だったんですかね。

**松本**：そういうご両親のもとに生まれて、物心つく頃から絵は描き始めていたんですか？

**スズキコージ**：前にNHKの「わくわくラジオ」とかなんとか、朝の8時頃の番組があって、生放送に出たことあるんですけど。NHKの女性のアナウンサーが、「コージさん、産まれたとき、どんなふうでした？」って聞いたら、「産まれたとき、手に筆を持って、おっかさんの胎盤に絵を描きました」って言ったら、全国に放送されちゃったんですよ。そのときに僕の田舎では、おっかさんが近所のね、友達おばさん連中を集めて、じーっと聞いていたらしくてね。それで「あんた、あんなことをね、言うもんじゃないよ」って叱られちゃったりしてね。

**松本**：胎盤に絵を描いた…。

**スズキコージ**：まあ、ようするに、そのくらい幼い頃から描いてたということです。

**松本**：はい。

**スズキコージ**：まあ、終戦直後、僕は、1948年、昭和23年生まれですから。僕の田舎は、もうとにかく、道路とかアスファルトの道とか何もなかったですからね、だからもう釘で地面に絵を描いたりね。そういうことに明け暮れて。まあ、親父が帳面買ってくれると、そこに絵を描いたり。まあそういう絵は得意技ですね。寝るときに布団の中でも描いてましたから、楽しくてしょうがなくてね。

**松本**：それはもう小学校、中学校もずーっと絵を描き続けてきている？

**スズキコージ**：ええ。そう。もうだんだん、中学なんかになるとね。だんだん、ああいうの思春期っていうのかな？だんだんあちこちこころ、毛が生えてきちゃったりして。なんか体が痺れちゃったりして。これ俺どうなっちゃうんだらうってね。皆さんもそういう経験あると思うんですけど。そのうちに、だんだんこころ…火山の爆発っていうんですかね。わっ、今にくるぞーっていうのがね、それが17、8歳のときに、ここから頭が割れて、ボルケーノですね。

**松本**：火山ね。

**スズキコージ**：「大千世界宇宙大爆裂」って、自分で名前をつけて。今、東京の天文台の「星と森と絵本の家」というところで、「大千世界宇宙大爆裂」っていうね。神戸で今年描いた絵が、大きな絵が飾られていますから、物好きな方、ぜひ、天文台に行ってください。

#### 浜西高校「メンソレータムヌタクル団」

**松本**：中学の頃、絵描きになろうと思ひ始めたんですか？

**スズキコージ**：絵はね、絵は続けて描いてくださると思ってたけど、絵描きっていうのもよくわかってなかったから。絵は描いていこう、っていうようなことですね。

**松本**：高校のときにその…爆発するわけでしょ？

**スズキコージ**：はい。

**松本**：で、爆発して、なんかあの、家の中でもサルビルサ語を話し始めたという…

**スズキコージ**：あっ、それは…高校時代ですね。

**松本**：高校時代。何でその、通じない言葉を話し始めたんですか？

**スズキコージ**：何でって言われても…これまあ本当に、さっき言った来るべきものっていうね。オールネット・コールマンの、アバンギャルドのはしりのレコードに「世紀の転換」というのがありますけれども…まあ、予感があつて。まあ来るなあって感じですね。そしたらその自然発生的にですね、言葉が…「○！※□◇#△！（サルビルサ語）」

**松本**：「日本女子大学、とっても素敵な女性が山ほどいる」（サルビルサ語通訳）

**スズキコージ**：まあ、そんなんでいいです。とにかくね、ちょっと今イタリア語…今日、新幹線のなかでシチリアとの会話なんていうね。あのシチリアの作家でね。ちょっと読んでたものだから、ちょっとイタリア語が入っちゃいました。

**松本**：あの、それは家の中でそういう言葉を喋り続けていたんですか？

**スズキコージ**：うん。まあ、高校2年生の頃に、授業中に、例えば友達、隣の友達に授業中に赤鉛筆借りるときに、「○！※□◇#△????（サルビルサ語）」とかって言って。それでまあ隣のやつは最初ものすごく、ものすごく目を丸くしてね。もう授業中ですからね、もう、「赤鉛筆」って言えばね、大体わかるわけよ、大体ね。そのうちそれをしょっちゅうやるもんだから、段々あの、隣のやつも慣れてきて、彼もめっちゃくちゃ喋るようになるんだよね。で、僕がなんか言ったら、彼なりのむちゃくちゃ語を話すわけね。そいつからまた波及して、ようするに僕のクラスは、も

うほとんど全員がむちゃくちゃ語をね、サルビルサ語が出来るように。そういう状態で楽しかったです。

**松本**：そうですか。高校のときは、かなりおもしろい時代を過ごした？

**スズキコージ**：もう高校時代は、あれがなかったら、今ここに座っていないくらい、あのもう色んなアイデアが、もう火山がこう～ってなっていますから。次々といろんなことを。

例えば実存主義とかにかぶれてて、『嘔吐』なんて友達に借りて読んだけど、さっぱり意味がわからない。読めば読むほど謎が深まるばかりで。まあ、『嘔吐』っていうのを字引で引いたら「吐くこと」ってでたから、すぐ近くにどぶ川があって、端から覗くと犬の死体が浮いて、ものすごいあれだけど、それを覗いて「うっ、うう」とか、もう『嘔吐』。それを録音している友達がいたりなんかしてね。それであと水の、どぶ川の水の音を綺麗に録音して、教室にもって行って、それをかけたりするわけです。それで知らない奴はもう「谷川岳の川の音じゃない」とか言って、「おう。よくわかるな！」って言ってね。そうやって、まあ。

**松本**：その時代はさあ、ちょうどビートルズがすごかった時代じゃないですか。

**スズキコージ**：ええ、ビートルズ。聞きましたね。

**松本**：そうでしょ。そういうのは接触していたんですか？

**スズキコージ**：ええ。僕のうちはまだ、テレビを買ってもらえなくて。で、友達のとこに行くと、白黒テレビですね、丸っこいね。それでそこで遊んでいると「リバプールからすごい連中がでてきました」って言ってね。ビートルズが、かっこよく出てきて、「ジャ ジャ ジャーン」とかって。それで、その友だちのおっかさんが僕の頭を見て「あっ、コージ君の頭、あんたの方が不潔だけど、この人たちと似てるじゃん」、そう言ってくれたりして。もうビートルズのコピーじゃなくて、すでに髪の毛がボロ雑巾みたいになってたんですよ。ええ。

**松本**：ビートルズ関係なしに、もう長くしてた？

**スズキコージ**：ええ、長くしました。で、そのうちにビートルズのレコード、当時高かったですからね。ドーナツ盤にしても確か350円とか。あれがなかなか買えなくて。で、友達をレコード屋に連れて行って。もう買うようにこう…仕向ける。こうね、「ブリーズ・ブリーズ・ミー。こっちのこれがたまらなくいいんだよ」とかってうまいこと言ってね。「そう…そうか？」とかって金を出させて。で、まだそいつの物だから。それで多分一週間くらいしたら飽きるだろうと思って。で、また、プレーヤーだけ持ってたから。で、それで、押入れの中で聞いたりして。

まあ、ビートルズのやったことって言ったら、イラストレーションって言葉に近い、もうその通りかもしれないね。今までの画壇というか、アカデミズムの画壇から、彼らはもう飛び降りちゃって、エプスタインという天才的なアートディレクターがいたわけで。そうやってビートルズは世にでたわけですけれども。もうもしエプスタインがいなかったら、あの初期の頃のポール・マッカートニーとかジョン・レノンとか、二人で便器を首から下げて舞台でおしっこしちゃったり、それで演奏してたみたいなね。本当にもうならず者っていうかね。野良犬みたいな感じで、演奏してた

らしいですけどね。だからちゃんと彼らの髪の毛も清潔に、長髪でもいいから清潔にして、みんな舞台では絶対おしっこしないように。そういうようなあの…手なずけるっていうか…そういうことをして、で、ああいう野生児たちをですね、世の中に出してっただという、才能がある男がいたわけですよ。で、それはやっぱりすごいことだったなと思うんですけどね。

**松本**：野生児コージさんを、密かにサポートした先生がいたみたいじゃないですか。

**スズキコージ**：はいはい。友達もね。さっき言った伝染していった友達。あと僕と一緒に遊んでくれた友達にしてもね。もう何人かあの世にいつてしまってますけど。まあ、秘密結社を作ったりしてですね。

あの一、「メンソレータムヌタクル団」っていう。みなさんもご存知だと思うんですけど、メンソレータムですね。あの、あれでパッチを改造して、学生服の裏に隠しておいて、僕らの活動ってのは、まあ、あの一、石橋伸太郎っていう、一字違いで「石原慎太郎」になりますけれども。彼は今、中小…町工場の社長をやってますけれども。彼がメンソレータムの愛用者でね。学生服の裏に絶えず2、3個持っていて、いつも、で、つけたりしてね。で、そのうちに「コージ、やるか？」って言って、1個もらったりして。で、メンソレータムヌタクル団を結成して、それでどういう活動したか、っていうと、「早弁」って行ってまあ、新幹線で浜松の駅、みなさん通るときに浜松方面にこんな白い二階建くらいの校舎があって、あれが浜松西高なんです。僕はあそこにいました。そこで、こっちに太平洋が見えてね。もうあの昼過ぎになると、もう早弁食べちゃって、みんなほとんど、もう物理の授業になると、寝てる連中が多くて、こんななって。で、その連中に、練りに練った、みなさん、目にです！「ぬたくる」っていうんですけど。メンソレータムヌタクル団という、秘密結社ですけど。それでも「ひー」ってなって。まあ、そういう活動ですね。**松本**：ちなみに、来年（2013年）6月の絵本学会大会は浜松で開催します。コージさんは特別ゲストです。彼があの一、「メンソレータムヌリタクル団」じゃなくて、なんだっけ？

**スズキコージ**：「ヌタクル団」

**松本**：「ヌタクル団」。その時の活動場所も見学する事が出来ますので、是非来年の大会に参加して下さい。

**スズキコージ**：それでまあ、今日ここ、日本女子大学ってことで、今まであんまりこういうとこで話さなかったことを、ひとつさせていただきましたけど。



## 絵を描いていく

**スズキコージ**：僕が浜松西高っていうね、まあ、どっちかっていうと、真っ赤かな学校でね。共産党の先生が多かったせいで、労働問題とかをやっている先生が多くて。そこの生徒会長が、本当まっ赤な、じゃない、真っ黒の学生服をあの、頭の中はまっ赤かみたいいなね。生徒会長がこのこやってきて、「このクラスの鈴木君に、ぜひ学園祭の看板を描いていただきたい」「ああ、やりますよ」「内容は、勇気と友情と団結。これをぜひ盛り込んであの、畳三畳くらいの大きな看板を作りますから」って言って。僕も張り切っちゃって。「もちろん。勇気と友情と、なんだっけ？」「団結」「あっ団結ね。わかった」って、描いた絵が、ろれろれ人っていうんですか。「ろれろれろれろれろれろれ」ってね。もうとにかく世界はろれろれ族って、ああいうのに狂ってましたからね。ろれろれ族ってのはこうゆう風に舌をだしてこう「ろれろれ」ってやるんです。そのろれろれ族の若い男女を画面いっぱい描いた。それで生徒会長を呼んできたから、すごい青ざめてまして、なんかもう失神って感じですね。「あー、もう、君に頼むんじゃないかった」って口に出しては言わなかったけど、もう体全体で表していました。それでかわいそうだったんですよ。ろれろれ族とか書いてないけども。アートってのは恐ろしくてですね、ばーんって、わかりますからね。まあ、「西高の学園祭」って文字は入ってるんですよ、ちゃんと。そういうことがあって、物議を醸したということがありました。

**松本**：一応、高校卒業して美大に挑戦したとか？

**スズキコージ**：ええ、まあ、その前に色々絵に進む連中が僕のクラスに5、6人いたのかな？あの当時ね。で、みんな、東京芸大とか武蔵野美術大学（ムサビ）とかね、行きたい連中。僕もムサビの専修科ってのが一番授業料が安くて、親にも迷惑かけないくらいの値段で、なんとか借金していすれ返せるな、みたいなのがあったりして。で、そこを一応受けて。で、東京芸大ってとこも受けたんですよ。

**松本**：あの当時、確か授業料が年間1万2千円だったと思うんですよ。

**スズキコージ**：そう、多分。そんなことも僕覚えてないけど、安かった。国立はね。それで一応東京芸大の校庭に入ってたんですね、もう綺麗なビートルズみたいのがどわーっているわけですよ。「うわーすげーな、俺もう田舎のどぶねすみ」みたいな、もうみんな垢抜けてるんですよ。ビートルズスタイルの男の子と女の子とね。もうあの頃、もう全盛だったですもんね。ファッションもね。みんなきまっでいて。うわあ、これ俺、ビートルズ超えてるか…こういうビートルズも大好きだけれども、なんかちょっともう、通り越しちゃったみたいな感じでしたね。で、そこにいた連中がビートルズのファッションできめてましたけれども。で、まあ、試験ももうほとんどもうあの、石膏デッサンとか高校の頃やりましたけれども、腹減ってるから食パンを食べちゃって、食パンで消すんですよ。食パン食べちゃって。デッサンはね。で、あの頃レオナルド・コージとか、ベンブタコージンとかね。ペンネームを使ったことはあるんですよ。今回、あの一。

**松本**：便蓋って、「BENZA 展」ですね。今、四谷の糸いじうでやっています。高校のときの便蓋から、BENZAにつながっているわけですね。

**スズキコージ**：あの、色んなね、お世話になる場所ですから。まあ、便座がなかったら、ほんとあの、野生の感じでですね。野原するのが一番理想的ですけども。まあ、そういうこと考えて。まあ、そうですね。高校生のとき、そういうアイデアが出尽くした、感じですかね。

**松本**：それで、あの僕が興味をもったのが、大学に行っても、どうせ大学に行かないような人かと思ったのですが、ずいぶんもぐりで、色んなとこに入って。

**スズキコージ**：はい、ええ。行ってないのは女子美くらいで。あとの大学は堂々ともぐりで、行きましたけど。で、女子美では、ヌードモデルの募集とかあるんで。そこ行くと、バイト代がすごく良くて。当時、戦争でベトナムの米軍の死体が立川基地に来て、それで死体洗いをやってる奴から聞いたら、同じ額なんですよ。一日に支払われる額が。だけど、友達から「あんな死体洗いなんてのは人間変わっちゃうから、絶対行くな」ってそのとき、念を押されたくらいで。まあ、まだそしたら女子美のヌードモデルの方がいいかなあって思ったけど、あの頃、まだ栄養失調で僕。ほとんど冬なんか食ってないから、電信柱と電信柱の間、北風に吹かれながら。電信柱までよろよろと歩いて行って、呼吸整えてもう一本行く。

であの頃、セツ・モードセミナーで、飯野和好と知り合っってね。ジミ・ヘンドリックスの写真を、四谷のなんとか美容院に持って行って、「すみません。僕らふたり、こういう風に髪の毛してください。」って。おばちゃんが「うわあー派手な人ね、この人。何これ。この爆発頭」ってね。こういうぼーんって被るやつですか。なんか電気ショックみたいなのが被って。で、飯野和好はうまいこといったわけですよ。すごくいい感じに仕上がったんですけど。問題は僕で、僕が大失敗だった。ようするにあの髪の毛が、飯野和好の方が、まあ触って見ればわかるけど、あの…針金みたいに堅いんですよ。僕の場合はほら、ふわふわで。綿菓子みたいにふわふわしてる。それで、僕のアの…、飯野和好は本当にこうなったんですよ。僕の場合は、一応こうなったけど、外出て、北風が吹くと、エアーブラントとみたいに、髪の毛が全部こっちに。こっち側ほとんど全然、ふぬげ状態っていうんですかね。非常にかっこ悪くてですね。それであの飲み屋の…、阿佐ヶ谷あたりの安い飲み屋に行くとおばちゃんに「アツと驚く為五郎」って、からかわれちゃって。もうポロアパートに逃げ帰って押入れの中でほっかむりして、「わーえらいことになっちゃた」って。

**松本**：もぐりで行って、何を勉強してたんですか？

**スズキコージ**：勉強ってことじゃないですね、あれは。

**松本**：何してたんですか？

**スズキコージ**：絵、描いてましたよ。

**松本**：えっ、アトリエに行って、一緒に絵を描いて帰ってくるの？

**スズキコージ**：いや、アトリエは入ってない。

**松本**：入ってない？

**スズキコージ**：ちゃんとセツ・モードセミナーの前にはロビーがあって。

**松本**：はい。

**スズキコージ**:今でもあると思うんですけど。広いロビーがあって。長沢節先生がお元気な頃は、ロビーは一般の人が入ってもよろしいって。で、そこで僕はもう散々絵を描いて、飯野和好とかペータ佐藤とか、授業が終わって出てくるのを待ってたんです。まあ他にも色んな友達いましたけれども。だから授業は、セツ・モードセミナーに…教室に入ったのはあの、節先生がね、「コージズキン、今度あんたモデルやってくんない？」とか言って。「えっ、モデルですか？」ってね。やったことありますよ。まあデッサンですね。もうあの頃ちんけな格好してましたから。もう帽子も改造したトンガリ帽子とかね。もう首には、時計を壊してぜんまいとかまいて、じゃらじゃらしてた。

**松本**：いましたね、そんな感じの人。じゃあ基本的には、美術の勉強ってというのはまともにはどこでもやってないんですか？

**スズキコージ**：そういうの、考えられないっていうか。まあ、それに一番近いのは高校のときに、石膏デッサン、ブルータスのをやったのは、あれが一番アカデミズムに近づこうと、一応ね。大学にあの、入ろうかなって思ったわけですから。全部落ちましたけど。

ムサビ落ちたときの話は、まずムサビに入ってどういうことを、どういう表現をこれからやっていきたいか、って論文を書かされた。で、僕は魔法画家になりますって書いた。それで、イラストレーションは、ど真ん中に、確か原稿用紙のど真ん中に描いちゃって。それも色鉛筆で三色くらいで描いた覚えがあるんだけど。あれ返して欲しいな、って思うんですけどね。もうないか。すいぶん昔の話ですけど。そういう論文を書いて。で後、石膏デッサンはひどいもんでね。あのペンネームも「コージン」とかね。そういうペンネームの方が大きかったりして、ひどい石膏デッサンですけども。

面接があるんですね。ムサビの教授が3人くらい目の前に座ってるそこに、僕はさっきの時計じゃらじゃら、ぜんまいじゃらじゃらと長靴履いて黒すくめで。それで髪の毛はむさくるしいなんか汚い、汚いスナフキンみたいな感じで。で、コーヒーの麻袋みたいな背負っちゃって、すっかりその気で。それで、その面接ですね。ひとりの先生が、「君はもしムサビに入れなかったらどうするの」って言うから。「僕は、赤坂の割烹屋の住み込みで小僧として入るような話もありまして」とか言って、「あっ、それは良かったね」って。で、そのときにちゃんともう、ダメっていうのはわかったんだけど。

**松本**：で、やっぱり絵を志してるわけですから、色んなものに影響を受けるわけでしょ？その頃、気に入ってた絵描きとか、影響受けた絵描きとかってのはありますか？

**スズキコージ**：まあ小学校の時は、例えば山下清、放浪の画家ね。

**松本**：はい。

**スズキコージ**:山下清展に、ものすごくたくさんの人が入場してて。僕は小学生ですから、大人たちに連れられて。大人は背がおっさいですよね。その隙間から山下清の絵を見て大変感動した覚えが

ある。それから、近所に目の飛び出たおばさんがいて。そのおばさんはあの、ゴッホが好きだったみたいで、その画集を貸してくれたり。で、ゴッホの絵もこう…印刷物ですけどもすんごい気に入って。で、僕は最近模写したので、『馬鈴薯を喰う人々』っていう。あのみんなでじゃがいもをね、貧しき労働者の人たちが食べてる、あの絵が大好きで。ちなみに、ゴッホは3月30日生まれで、僕は魚座なんですけれどもね。おひつじ座の人っていうのはそういう激しく渋い、あのなんていいますか、スピリチュアルな絵を描くのが得意な人が多いですね。

**松本**：山下清っていうのは、点描や細かくちぎった貼り絵をやったり、凄く才能のある人で、放浪していた絵描きさんです。それから、ゴッホの『馬鈴薯を食べる人たち』っていうのは、彼は、フランスに来る前のオランダ時代に、暗い、人々が顔を寄せ合ってどうやって生きていったらいいのかということをやっているところを描いたんですね。そういう、あの華やかになる前の絵に感動したということですね。

#### 堀内誠一さんとの出会い

**松本**：堀内誠一さんに出会うのは、その後ですか？

**スズキコージ**:うん。その赤坂の天ぶら屋の小僧をやったときに、堀内誠一さんは昭和ひと桁の人間で、当時東京の銀座の、今の平凡出版、「ブルータス」なんかのね、僕の母親の兄弟、えっと、竹川っというおじさんがいたんですね。そのおじさんと堀内誠一さんは学童疎開、富山ので、一緒だったらしくて。

それで平凡出版の、昔の社屋に行ったことがある方はわかると思うんですけど…木の板に油塗ってあるような本当に古い。昔の歌舞伎座の裏の方にあっただんですけどね。それが昔の平凡のの創刊号が出たり、そういうものすごい画期的な、編集者はほとんど遊び人みたいな連中ばかりで、ですね。三島由紀夫が来てたり、伊丹十三が入りしたり、ファッション関係者が出入りしているような、もう本当にユニークな人の坩堝みたいな出版社だったんですね。

で、そんな所で、竹川のおじさんと再会を祝して一杯飲んでいるときに、「実は自分の甥である少年がいて、小僧がいて、で、そいつがあわけのわからない絵を描いてて。堀内君ぜひ見てやってくれないか」って言って、堀内さんを連れてきてくれたんですよ。で、「コーちゃん、ちょっとおもしろい人来たよ」って言うから。

あの頃、屋根裏部屋に暮らしてしまして、溜池のね。で、その親方が「この店が火事になったら屋根づたいに逃げなさい」と。向こうにニューオータニとかなんかね。あのビートルズが泊まったホテルですけども。赤坂の溜池ですね。それで下に降りていたら、なんとシャルル・アズナヴールとゲゲゲの鬼太郎を混ぜたような方が、ちょこんといまして。それが堀内誠一さんと僕、最初の出会いでした。

僕はこういう大人を見たのは初めて、っていうような方でした、堀内誠一さん。で、堀内さんに物凄い量のスケッチブックに、まあ月光荘の大判のね。点がいっぱい入っているスケッチブックを、堀内さんにそこで見てもらって。で、堀内さんはばあーっと見て、で、まあスケッチブックによっては、堀内さん、逆さに見たりし

てね。それで「これ何冊か、3冊か4冊か、貸してね」とか言って、それで帰っていっちゃったのね。それで次の日に電話がかかってきて「実は今、平凡パンチ女性版の創刊号を作っている最中で、君の絵をそのイラストレーションのね、新人として、カラーで載せたい」って、そういう電話がかかってきた。それで、もう僕はビックリしちゃって。それがきっかけですね。

**松本**：堀内誠一さん、ご存知の方が多いと思いますが、もちろん絵本画家としても有名ですけども、エディトリアルデザイナー、グラフィックデザイナーとしても物凄く著名な方で、anan（アンアン）とかそういうものも作っていた方です。堀内さんからは影響は受けたんですか？

**スズキコージ**：影響を受けたっていうか。堀内さんはね、僕を渋谷の南平台っていうところの、アド・センターに連れて行って。昔のトルコ大使館だって言ってましたね。行ったことあります？物凄くおもしろい、ユニークな、木造の洋館がありまして。それが全部アド・センターっていう、堀内さんが主催する館だったの。

これが庭が広くてですね。そこである日、僕が遊びに行くと裸の幼い男の子や女の子がね、芝生でカーカー言って、20人くらいで遊んでて。そんで、そんでピキニを着たお姉さんもキャッキヤ、キャッキヤ、遊んでいるわけですよ。堀内さんは、上からこんな紙飛行機を飛ばしたりして。それで、沢渡朔カメラマンが、それをバシャバシャ撮って。もうそういう、ようするにフェリー二の映画の最中みたいな模様が、展開されていて。それが雑誌に載ったり、写真集になったりしてしているわけですからね。まあそれこそアド・センターは、そういうことが当たり前に、毎日なんかやってましたよね。

僕は社員ではないけど、遊びに行っていいというようなことになりまして。で、僕は赤坂の天ぶら屋を抜けまして、渋谷まで、坂ですね。あそこ、渋谷っていうくらい坂で。ずっと行って。堀内さんと喋ったり、好きな絵を描いたり、昼寝したり。それで、食堂もあって、若いから腹へってて、そこのおばちゃんに定食を食わしてもらって。で、大体夕方の5時が6時くらいになるとまあ、堀内さんが飲みに出かける。そんなときに僕を連れてってくれるんですよ。まあ新宿の「いないいないばあ」とかね。笑っている方、行ったことあります？結構あの、渋谷にもありましたね。まあ堀内さん、行きつけの飲み屋がありましてね。パーですね、ほとんどね。まあそこで、最初カウンターで僕は酒飲めないから、隣でコーラかなんかを飲んでると、さっき隣にいたのに堀内さんがいなくて、あれっと思うと、美人のママの膝の上に乗かって、こんななって茶色い液体を飲んで、「やあ」とかって。そういうなんか、ひじょうにかわいい…なんすかね。センスというか…まあそういうのを平気でできちゃう人だから、すごい女性にもてたんでしょうね。

**松本**：もてるタイプの方でしたよね。

**松本**：その頃に、ひょっとして池田満寿夫なんかの絵を見てる？**スズキコージ**：あっ、池田満寿夫氏に会ったのは、実はビートルズのいろんな呼び屋さんがいて、その人が資金を出して、澁澤龍彦責任編集、堀内誠一アートディレクターで「血と薔薇」っていう本が創刊されたたんですね。天声出版。確か天と声っていうとこ

ろだったかな。で、「血と薔薇」ですね。それで、ようするにかなりスキャンダラスな本で、まあ、三島由紀夫のオールヌードだとかね。まあ、それには堀内さんが鎌倉に三島由紀夫と撮影隊を連れて行って。で、堀内さんは、スーツのまま茅ヶ崎かどっかの岩山のドーンッと、東映映画みたいなところに入っていって、「三島さんここに来て」とか言って。三島さんも「あっ、あの人スーツで海に入っちゃったよ」みたいな。それが堀内誠一さんなんですけど。で、三島由紀夫もオールヌード…股間もこんなこんなで。

**松本**：全部一緒に行ってたんですか？

**スズキコージ**：僕は話聞いただけ。

**松本**：ああ、話聞いただけ。

**スズキコージ**：僕は話し聞いただけで、見かけたことはありますけれども。岡本太郎もね。

**松本**：はい。

**スズキコージ**：で、まあ今は「血と薔薇」の話で。

**松本**：はい。

**スズキコージ**：それで、創刊号に依頼があって、「ドラキュラの絵を描かない？コージズキン」なんてね。で、僕は巻頭のね、コラージュを。ここからポロポロポロと赤いトウモロコシが出てるような写真を。

**松本**：その頃からコラージュを？

**スズキコージ**：もちろん。もちろん。あの時は20歳ぐらいでしたから。それであの…その「血と薔薇」が、大変評判になってですね。当時の「11PM」ですね。まだ大橋巨泉っていう人が司会やってましたよ。澁澤龍彦さんと種村季弘氏とかと池田満寿夫氏とか、なんと全然無名な乞食みたいな僕が横に座ってるっていうね。それで対談…対談じゃないな。5人ぐらいで話すっていう。そういう番組だったんですよ。今考えるとよくね、僕みたいな者を呼んでくれたなってね。訳のわかんない。ね？それで巨泉さんが僕の作ったお面被って、「はい、コマーシャル」ってね。

**松本**：へえー。

**スズキコージ**：やったりしてて。そのころ僕、テレビなんか初めてのことで。あの…新宿で露店してた頃ね。着ていくものも…そばに来るだけで鼻つまむ連中ばっかりな感じで。で、みんな臭いから、鼻つままないんですけれども。それぐらい。それで友達にこんな薄手のジャケットを借りてった覚えがあるんですけれどね。それでテレビ出演して。隣に池田満寿夫さんがいて、その時、瘦せていてね。こんなかっていい、キース・ジャレットタイプっていうんですかね。画商がちゃんとついてきていて。そういうかっていい、かわいい人だなあって思いました。

**松本**：じゃあ人間としては接触していても、絵は全然興味をもたなかったんですか？

**スズキコージ**：あっ、池田満寿夫は僕、京王デパートだと思ったけど、そこでポルノグラフィー展みたいな。こんなちいちゃな、それを千何点、どわあーっと。それをまだ僕が赤坂の小僧だった頃に見に行って、ショックでしたね。

**松本**：池田満寿夫っていうのは版画家なんですけれども、最初の頃ものすこく小さな、オリジナルの、半分ポルノみたいのをずーっと作っていて、で7、8人、女の人が変わるんですけど、変わる

たびにものすごい絵が変わってく人で。最後はヴァイオリニストの佐藤陽子さん。

**スズキコージ**：富岡多恵子と同棲していた頃かな。ミニチュアの連作をみて、すごく興奮して。

**松本**：わかります。

**スズキコージ**：友達に買わしちゃったりして、お金ないから。大体そうですよ。あの頃はお金ないから。色々考えて買えそうな奴に買わせちゃって。

**松本**：高校のときから、それやってるんですね。

**スズキコージ**：もう僕は、そういう能力は抜群ですよ。かなり四畳半か三畳間で5メートルくらいの絵を描くかとかね。天井に5メートルくらいのこれくらいの幅の絵を描くとき、9メートルくらいの絵描いたこともあるけど、天井にこう画鋲で貼って、で、この辺を描いて。描きあがったら机の上にまた椅子乗っけて、それでぐるっと回しながら。それで完成させたこともあるし。いかに狭い所でね。けど、畳一畳くらいでね、三鷹で絵描いたときも、結局引きがないから、隣のうちのアパートに行っって、「すいません。ちょっとこっちから絵見たいもんで」って言って。向こうの人、おばあちゃんもビックリしてましたけど。「なんすか。あんた」って。「おばあちゃん、ちょっとあそこの北の部屋に僕の絵がありまして。見えるでしょ?」「なにあれ、なに～。気持ち悪い～」って。そうやって遠く離れて見ることもありました。東京ですから、狭い。

**松本**：絵本の世界に入ってくるのは、堀内誠一さんとの関係ではないんですか？

**スズキコージ**：いや、もちろん絵本に誘ってくれたのは、堀内誠一さんですけども。色々。ようするに飲みに連れていって来て。はなちゃんともみちゃんがまだ幼い頃に会って。で、僕の靴がでかいから、大きい足のお兄さんが今日泊まりに来たと。ツイゴイネルワイゼンの映画みたいな、趣のあるお家に堀内さんとみなさんが住んでいて。僕の記憶だと..確か入り口の左側に電話室があった。電話室があるなんてね、かなりのおもしろい館で。それこそ鈴木清順さんの映画みたいで。そんで、えっと僕風呂入りたかったから。すると路子さんが「コージズキン。今風呂沸かすから、こっちで何か食べてて」とか言って、お茶漬けなんかを堀内さんと食べたりして。で、そのときに横井弘三とか

**松本**:横井弘三、板絵ですっとやってて。やっぱり物凄く才能があって評価もされたんだけど。後でネットで皆さん調べてみてください。物凄いおもしろい絵を描いています。好きだったんですか？

**スズキコージ**：僕は横井弘三さんは …、僕のひいおじいさん、血のつながっていないひいおじいさんだと僕が勝手に思っって。

**松本**：ああ、ぜひみなさん、物凄くおもしろい絵を描く人なんでチェックしてみてください。

**スズキコージ**：で、路子さんが「コージズキン、お風呂沸いたわよ。」って言うから、ばあーっと脱いで入ったら水風呂でした。

松本：堀内さんの奥さんの路子さんは、内田莉莎子さんの妹さんなんです。で、お父さんは内田巖さんっていう絵描きさんなんです。

**スズキコージ**：で、そのお父さんが内田魯庵。

**松本**：そうそうそう、明治の知識人ですよ。

**スズキコージ**:もう、内田魯庵の小説はね、それから興味をもって、ずいぶん読み漁ってますけど、おもしろい。明治のね。

**松本**:そうです。すごい人です。全然関係ないけど、内田巖の「風」っていう少女像があって、それをコピーして岩崎ちひろは一生懸命描いてました。まあ、それは置いときまして。えーっとそうすると、色んな所で、人間的なつながりのところで、人を見つけていたりとかしながら、自分の作品を作ってくわけですね。

**スズキコージ**：はい。

**松本**:ということは、絵本というのは … もともと絵本を作りたかったとかってわけではない？

**スズキコージ**：うん。やっぱり堀内さんが福音館に連れていってくれたり。ある日アド・センターに遊びに行ったら、堀内さんがね、「5、6枚はがきに、ここにコージズキンなんか絵を描いて。何月何日にみんなを集めて、一席設ける」みたいな。「君の働いてる赤坂の割烹料理屋で」って言って、で僕が描いて。それで僕の全然知らない5、6人の人が、その日集まってくれて。最初に来てくれた人がもじゃもじゃ頭の人で、瀬川康男さんだったんです。

**松本**：瀬川さんとそこでつながるんですね。

**スズキコージ**：で、次に現れるのが、こんな丸い眼鏡をかけた瀬田貞二さん。

**松本**：瀬田貞二さんっていうのは、博学な、平凡社の児童百科事典を編集された方で、絵本のことにに関して、何でも知っているような人。

**スズキコージ**：で、それで松居さんが来てくれて、堀内誠一さんが来て、で、長新太さんはなんかの用事で来なかった。服部洋一さんっていうんですかね。なんか音楽関係の人が来てくれて。それで僕は屋根裏から色んな絵を持ってきて、瀬田貞二さんに見てもらったんだけど。そのとき瀬田さんが、「『ライオンと魔女』の初版のこういうのが出たから、君にプレゼントするよ」って、目の前でサインをしてくれて、『ライオンと魔女』をもらいました。それも今考えると、みなさん亡くなっちゃってる感じで。とにかく、錚々たる人たちがね、僕のまあ、激励会をしてくれたんですね。

#### 瀬川康男さん・秋野左牟亥さん・長新太さん

**松本**：瀬川康男さんの絵本が後ろのスクリーンに写ってますけれども、瀬川さんってのは空間をどうやって埋め尽くすのかって意識をもっていた方で。ひょっとしてコージさんとちょっとつながりませんか？

**スズキコージ**：もう、瀬川さんの仕事に、徹底した職人ぶりっていうかね。まあ、瀬川さん昔、四谷に暮らしてですね。

**松本**：ええ。

**スズキコージ**：そこに堀内さんと遊びに行ったりすると、石版画の部屋なんかはもう二畳くらいの部屋かな、もうインクだらけで、真っ黒なんですよ。で、巨大な石版画のブースがあって、そこで僕も..岩崎トヨコさんとかね。全プス連の、彼女は当時イラストレーターで。あと柳生弦一郎。で、僕もそこに遊びに行っって、そこでジंक板上に、絵を描かせてもらって。瀬川さんのでプレスして。遊びに行っって楽しくやったことがある。

まあ、瀬川さんとそれから … しょっちゅうではないですけど。まあ瀬川さんと数時間、ふたりだけいるときもありましたけれども。もう、点をひとつ打つにしても、もう … なんですかね。気が遠くなるくらい、素晴らしい点を打つんですよ。で、僕も点なんかね、打っても。筆もバシバシの筆でやってた。で、そういうことやっているときに、こっちに秋野亥左牟さんがいたりして。

**松本**：ああ、秋野亥左牟さんも。

**スズキコージ**：そう。秋野亥左牟さんもおひつじ座だし。瀬川康男さんもおひつじ座なんですよ。詳しいでしょ？そうしたら秋野さんも秋野さんで。「こんなへたくそな点を打てるんだと。もうコージズキン威張ってやれ」って、そういうようなことを言う人で。で、瀬川さんはあくまでも、ぴっちりやりました。

**松本**：秋野亥左牟さんは、ご存知の方も多いかもしれませんが、秋野不矩さんの息子さんで、世界を放浪された方なんですけれども、各地にそれなりにいつも素敵な方がいらした方です。絵巻のような絵本を作られていて、福音館からも何冊かいい絵本が出ています。2013年の絵本学会大会の開催地の近くに、秋野亥左牟さんのお母さんの秋野不矩さんの美術館があります。じゃあ秋野亥左牟さんの作品を見たりとか色々な交流があったんですか？

**スズキコージ**：もう一緒にあの、秋野さんは笛を吹いたり、楽器が得意だったからね。僕が、怪しげな歌を歌ったり。もうそういう遊びの世界でね。もう泡盛を飲んだりしてですね。

前に、岡谷で瀬川康男さんと、小さな絵本美術館の武井利喜さんと一緒になったときに、瀬川康男さんに、「瀬川さん、カラオケ行かない」って誘ったんですよ。かなりミスマッチでしょ？でもそしたら「おう、お前さんが言うんなら、行こうか」って。カラオケに行ったことがあるんですよ、瀬川さんとね。そしたら瀬川さん、歌ったんですよ。何を歌ったか、もう覚えてないけど。かなりおもしろかった。あれが最初で最後だったと思うんですけど。

あと長新太さんは、ピンポイントギャラリーかなんかで、グループ展かなんかあったときに、次の会場に行こうってなって。なぜか近くの交差点に立ってたのが、長さんと僕とふたりだけだったんです。で、渋谷方面が真っ赤な夕焼けで。「あっ、夕焼け」ってね。映画のシーンみたいで。長さんのイラストみたいな、本当に。もう長さんの絵が描いてあるような夕焼けだったんですね。

それで、ふたりで歩いていって、ちょっと半地下の会場で。イエスの最後の晚餐みたいな非常に長いテーブルがあって。で、ふたりだけでしょ？で、ふたりで入って。また後からどンドン人が来るんですけど。で、長さんが「鈴木君、僕たちは離れて座ろうね。」って言ったんですよ。長さんが一番奥の方に座って、ちょこんと。僕は離れた長いテーブルの、こっちに座って。何話したか、覚えてないけど。もう本当長さんの絵の世界でしょ、なんか空間が。もうそれがなんか、生きてる長さんとの最後だったんですね。

僕の絵とか結構好きっていうか気に入ってくれてたみたいですね。『やまのかいしゃ』っていう、僕のひどい文章で、片山健さんがすてきな絵を描いてくれた絵本があって。「P eeBoo」っていう雑誌で、長新太さんが褒めてくれて、「やきもち焼けちゃうなあ。片山健とスズキコージ」っていうようなことを、たしか書いてくれた覚えがあるんですけども。嬉しかったです。

**松本**：長さんは、ものすごく絵を見る人なんですよ。現代美術に興味があって。その辺が彼のエネルギー源だったんだと思いますけれども。

**スズキコージ**：だけど、飲み屋に数人で行って、長さんもいたりして。僕があ頃「長い髪の少女。孤独な瞳」なんて歌うと、長さんが「うゑーい」とかって冷やかすんですよ、長さんが。あっ、長さん冷やかしてくれてるみたい。こっちも喜んじちゃったりなんかして。

#### メキシコ

**松本**：コージさんが物凄く作品の中で影響を受けてる場所がありますよね。メキシコ、それからバリ島、東欧。なぜメキシコに行き始めたんですか？

**スズキコージ**：それはですね。竹田鎮三郎さんって、メキシコに今、現役の素晴らしい絵描きさんがいて、今もまだ住んでいると思うんですけども。彼は、どういうことでメキシコに入っっていったかっていうと、北川民次さんの弟子のような存在だったんですね。それでもう … 何年、何十年も遡る訳です。シケイロスっていう人の、こんな絵がありますけれども。

**松本**：物凄いい腕を描いたり、ようするに今の北川民次だとか、シケイロスとか、リベラとか、いろんな画家が、メキシコにはいます。それはメキシコ革命というのが、1917年ロシア革命と合わせて起きる。専制政治から大きな変化をするんですけども、北川民次さんもそのときに新しいメキシコに行っている人です。そして北川民次さんとシケイロスとかリベラとか、色んなそういう人達とつながりがあって。あの時代、壁画運動がありますよね。

**スズキコージ**：そうです、そうです。メキシコの話になると、壁画は大変な圧倒的な魅力がある。もう野外、町の中に絵がね、巨大な絵がどーんとありますから。これはすごくインパクトがあって。で、ようするに、メキシコ人は文盲の人が多かった。ようするに文字が読めない。絵だったらわかる。メキシコの先住民の現在に至るまでの歴史を絵でたどれる。

ディエゴ・リベラはフリーダ・カーロの旦那でもあった。国会議事堂みたいな所にね、先住民の歴史をたどる。これは文盲の人たちにとって、こんなに嬉しいことはない。絵を見れば、歴史が読めちゃうっていうことですね。そういうようなことで、当時のメキシコ政府は、第一線の絵描きたちに、描かせたっていうことで、広まったみたいですね。

**松本**：北川民次は、静岡県出身ですよ。

**スズキコージ**：ええ、そうそう。よくご存知。岩波の本で、『絵を描く子供たち—メキシコの思い出』でしたっけ？北川民次さんのね。向こうのアメリカからキューバ、メキシコにやってくるまでのドキュメントを … あの日記風の本が一冊ありますけれども。ものすごくおもしろいですね。盗賊に襲われた話とかね。

**松本**：絵はいわゆるフォークアートに近いですよ。基本はしっかりしているけれども。色んなことに大きな影響を与えた人なんです。北川民次もぜひみなさんチェックしてみてください。

**スズキコージ**：『うさぎのみみはなぜながい』っていう絵本がでますよね。北川民次さんね。僕も大好きなんですけど。

**松本**：北川民次さんとかメキシコとかっていうのは、今のコージさんを作っていくうえでは、かなり大きな影響があったんですか？

**スズキコージ**：うん。ようするに先住民アートって言われるんですかね。メキシコにはそういう博物館とか美術館がもう各地にあります。まあ、そういうところも行くわけですけども。そうすると、例えば切り紙ですね。こういうあの…ね。ここに飾ってある、僕がいつもやってる切り紙と酷似してまして。あれ、俺、昔ここに住んでて切ったのかな？ってくらいに似てるわけですよ。きっと僕の中にそういうセンスっていうんですかね。全くDNAとかなんだかわかんないけど。そういうふうには思っちゃう、似てる。だから、僕の場合、メキシコの先住民のを見ていて影響された、とかそんなんじゃない。行ってみたら確認してるって、そういうことが多いです。

**松本**：辿っていくとDNAは近いんじゃない？

**スズキコージ**：だから、メキシコの先住民の村でおじいちゃんと片言で話したら、「僕らはモンゴリアンで、モンゴロイドで。あっちの方で、北極の方。古代に渡ってメキシコに入ってきたんですよ」って僕が見よう見真似で言ったら、「全然違う」って。「えっ、何ですか？」「あそこにトウモロコシが生えてるだろう。俺たちはあのトウモロコシから生まれたんだ」って。そりゃそうだよ。トウモロコシで生き延びてますから。トウモロコシから生まれたんだって、そのおじいちゃんは言い切っていましたね。「だけどお前は、どうみてもナバホ族の末裔みたいだな。私が察するにお前はナバホ族で何かまずいことがあって、ここをブラブラしてるんじゃないか」って。で、「私が察するに、彼らはもう心配して待てるから、もう帰りなさいよ、ナバホの村に」って、そう言われちゃって。日本に帰るとかそんなんじゃない。ナバホに帰れて言われちゃったことがあって。

**松本**：いや、ナバホとメキシコ近いですから。

**スズキコージ**：近いですね。つながってますもんね。そんなことがありましたけれども。

**松本**：基本的に、アメリカンネイティブの人たちの文学とは「あらゆるものに命が宿っている」そういう思想ですよ。ね。

**スズキコージ**：はい。

**松本**：それは例えば、月だとか石だとかアライグマだとか、人間とか、全部同等に扱うようにできている。コージさんの絵を見ると、僕なんか、あらゆる物に神が宿っているというような、そういう感じがするんです。そういう感じはないですか？

**スズキコージ**：そういう…もうあのね。なんて言ったらいいかな。僕もそこらへんのことにはよくわかってなかったけど。段々いろんな人、アートに出会ったり、色々旅したり影響受けたりしてるうちに、これはどうみても世の中ってのは。特に僕の好きなものは、みんなそういう命が宿ってるんだらう。輝いてると思うし。所詮はみんな人間が作っている。あと自然がそのまま生き生きとあるわけ。今は人間はだいぶ破壊もしていますけれども、それでも生きてるものにはみんな魂があるって考えですね。それが一番納得がいくと思います。

## パリ

**松本**：パリ島とか、あるいは東欧というのは、コージさんにとってどんな場所なんですか？

**スズキコージ**：まあ、今日すら一っと、こう飾ってありますけれども。これは、パリ島で作ったろうけつ染めなんですよね。そこにある横長のやつは、このまま腰巻になるんです。腰巻サイズですね。これは男女兼用で腰巻になります。

これを、ろうけつ染めって言って、白い布をパリで渡されて、床に這い蹲ったりして鉛筆で描いて。白い線が、じっと見ると白い線がありますけれども、これは元々僕の鉛筆の線に沿って、「チャンティン」って言って、蠟引きをしてくれるんですよ。ぐつぐつ鍋で蠟を煮てですね。烏口みたいなところから、線でもう煮えたぎった蠟が滴り落ちる。それで、僕の鉛筆の線に沿って、引いてくれるんですけども、これが職人技。瀬川康男さんも出来ないんじゃないかなってぐらい職人技。

で、その「シンケンケン」なんて書いてある太陽の…ありますね？あれは全て僕が蠟引きをやりました。で、一番最初に行ったときですね。全部自分でやってみようと思ったんですけども、もう、スズキコージのSMショーみたいになってしましまして。僕の綺麗な肌に蠟が滴り落ちる。だけど、あそこまで出来ましたからね。それで蠟を引いたところで、まあカラーインクのようなもので、もう床から1メートルくらいのところで、塗り絵みたいにやりますね。それで、蠟を引いたところが色分けになると。それでグラデーション、その黄色からオレンジになっているところに水を引いたりしてグラデーションをつけてますね。それで、塗り終わってしまうと、定着液につけて、大きな鍋に放り込んで、もちろん水も入れてぐつぐつ煮ますね。それで煮えたぎったところで、鍋をおろして水洗いして。向こうは太陽のことを、「マタハリ」って言いますね。インドネシアの太陽の下に干して、完成です。

**松本**：まだご覧になっていない人は、あとでよく見てください。で、パリにはこういうものを製作しに行ってたんですか？

**スズキコージ**：いやいや。もうほとんどは遊びに行ってたことですけども。まあ、パリはね。僕はトゥガナン村っていう先住民の村に通うことになって、ホテルのボーイのおにいちゃんと仲良くなっちゃって。「結婚式があるから今晚おいで」なんて呼ばれちゃって。

それでまあ、向こう高床式で、もう星はね、すごい綺麗でね。ジャングルのなかで星も綺麗。そこで、高床式のところに、僕なんか行



くとそこにあげてくれて。そうすると男達が車座になって。15、6人。まあんですか。当時のパリの「シンケンケン」。あっ、「シンケンケン」っていうのは「ノープログレム」って意味です。みなさん。あんまりくよくよしないでね。なんかかなるさってことを「シンケンケン」っていうんですね。これは古代バリ語なんです。インドネシア語ではなくて、古代バリ語。もしみなさんバリに行って「シンケンケン」なんて言ったら、「お前なんでそんなバリ語できるんだ」って言って驚かれちゃうと思う。

そんでさっきの結婚式の高床式の藁びきのところに、もう真夜中に、それでも周りの男達が香取慎吾だとか緒形拳とか、宇崎竜童とか日本の代表するいい男の原型みたいな連中がびっちりいまして、15人くらい。本当惚れ惚れする。で、みんな精悍な感じ。で、ここにナイフをさしてますけれども。まあ、そういう腰巻して。あとTシャツ着てるだけ。そうして、どんどん酒がまわってくる。で、よく見るとバナナの皮で編んだようなお椀で、向こうに大きな甕がある。それはアラックとって、発酵している。それを掬い上げて飲むわけですよ、車座になって。もう吐きながら飲むんですかね。もう浴びるように飲む。うわあーって。もう物凄。いくらでもありますから。ヤシの木のお酒ですから。

**松本**：コージさん、そういうところにはどうやって行って、何語で喋っているんですか？

**スズキコージ**：何語で喋ってる？別に喋れなくても、居心地がすごくよかったです。なんていうんですかね。言葉じゃないっていうか…。いわゆる動物になっちゃってるんですね。あの…感じがね。

で、みんな歌いだすわけですよ。あちこちで。まあ輪唱ですね。で、こっちのふたりが「アバリュウ」って、このパートだけを歌いだすとするでしょ？それを続けてますね。するとこっちの連中が、「うっぶぶぶ」とやりだす、ふたりが。そうするとこっちのふたりが、「オーレーラー」で、今もう3つのパートが始まってますよね？それでこっちの奴らが、「ボン、ボン」っていう。それでも四輪唱っていうんですか？これでねー、やってくわけですよ。これね、物凄いですよ。もうね。酒もガンガンまわってくるし、ヤシ酒が。もうトランス状態に入ってくるわけですかね、全員がね。もうね、笑えてきて、涙が止まらなくなる。嬉し涙っていうか、笑いが止まらなくなってくる。まあ、そういう状況で永遠とやって。で、誰か「ボン」とか言うのとそれで一応終わるんですよ。不思議。で、女性たちはこっちでお菓子食べたり、料理作ったりして。男達の酒宴の様子を見てキャーキャー笑ったりして。もう LOVE & PEACEの世界です。

**松本**：今の音の世界っていうのは、コージさんが描いてるときにも、自分の内側でも鳴ったりしているんですか？

**スズキコージ**：もう、あーいう体験でのね。なかなか…東京の中野の飲み屋でも、親しい連中と飲んでても、楽しいですけども、なかなかそこまでは出来ないじゃない。だけど、岸田裕子さんがあの…ご存命の頃、北軽井沢にみんなで行って、子どもたちが十何人か来たときに、それをやったんです。それで僕が子どもたちをパーツに分けたり、やって、テープレコーダーに吹き込んだことがあるんです。結構ね、出来ました。大人はそれがうまくできない。ようするに理屈で考えちゃうから。それ何の意味だって。

すごくややこしくなってくる。でも子どもたちはすぐやってくれる。もう僕が言ったとおりにやってくれる。それが可能なんです。だから子どもたちのストレートさってのは、本当、僕の強い味方ですね。それで延々とね、もう北軽井沢の山奥で、トンガの村長さんだった柏村さんとか、朝日新聞に載っちゃいましたけど。トンガの村長さんになっちゃった人知っていますか？日本人のね。トンガの島のね。そういう人がいるんですよ。絵描きさん。あの…そういう人も来てたりしてね。みんなと笑い転げた。そんなときもありましたけれども。

## 雪うさぎ FREE RABBIT

**松本**：第1部はそろそろ終わりなんですけど、最後に、コージさんがライブ・アートで描いた絵を、コージさんがどんな風に絵を描いていくのかを見ていただいて。さっきからそのすごく狭い所で、必死になって描いたりとか、ショーウィンドで描いたりとか、色んなところで描いてますよね。で、「雪うさぎ」っていう作品があって。それをスクリーンで見させていただきながら、どうしてこんな絵を描いたかっていうのを、みなさんとともに聞きたいと思います。

**スズキコージ**：現物は今、松本にあるんですよ？

松本：ええ、今、松本のトラットリア松本画廊に展示しております。スズキコージ：これは、吉祥寺の、2010年だから、吉祥寺のあそこの…、ごちゃごちゃした駅前のね。あそこにアップルハウスっていう、女性の服のお店があって。そこのショーウィンドウ、まあ、狭い路地があって、あの辺は今の時期というのは色々、買い物客で市場みたいにごった返してると思うんですけど。これが、横1m7~80cm×2mちょっとくらい。ちょうど今頃の時期に描いた。12月頃描いて。それでも本当にホカロンを入れたりしてね、描きましたけど。で、狭い路地なもんだから、通行人のみんな立ち止まって見ちゃうから、前の商店のおっさんが怒っちゃったりしてね。

**松本**：これが全体像ですね。えーっと、2m×180cmくらい。すごく大きな作品ですけども。最初に聞きたいのは、僕は何回かライブ・ペントイングを見えますけれども、コージさんが描き始めるときというのは、いくつかのイメージが頭の中にあるんですか？

**スズキコージ**：うん。このときは、この絵に関しては、ようするに2010年、次の年が兎年だっていうんで、ウサギを描こうと思ってましたね。まあそれだけです。ね。

**会場**：(笑い)

**松本**：じゃあまずウサギを描こうっていうところで、雪のイメージというのは、最初描き始めるときは全然ないんですか？

**スズキコージ**：うん。ちょうど12月の寒い、凍てつく、しかも野外の路上でしたから。熱いコーヒーとか差し入れにもらいましたけど。かなり寒かった。北風吹く吉祥寺、って感じで。で、描いてるうちに、こういうふうになら発生的になったわけですけども。で、題名をFREE TIBETにちなんで、FREE RABBITって。題名にしたわけですけども。このときはまだ次の年に3・11のああいふことになるとは、全く思ってたわけ。それの前年の年の暮れに描いたわけですね。楽しかったですね。



**松本**：これは見てて、物凄く楽しいですよ。まず、筆を下ろし始めたのはどの辺から？

**スズキコージ**：これ筆、ほとんど使ってないのよね。

**松本**：手で？

**スズキコージ**：最初は指でばんばん描いていって、で、あと筆の...、なんだ？毛じゃない方。割り箸とか、細かい作業する時はつまようじを使ったりするんですけども。結構そのほうが... なんすかね。縄文のワイルドな感じが出るかなっていうのがあんのね。ただずっと手で描いてると手がやぶけてくるのね。で、手が痛いから、ようやく筆を使うっていう感じですかね。

**松本**：全体の構図のイメージっていうのは、先に描き始めたときに頭にあるんですか？

**スズキコージ**：全くないですね。

**松本**：最初はまずうさぎを描こうかって思って、うさぎあたりからはいるんですか？

**スズキコージ**：このとき... 写真撮ってる人がいたからね。その人が物凄い量の写真撮って帰ってったから...、その人が一番わかっているんじゃないかな。僕ももう夢中でやってるからね。

**会場**：(笑い)

**松本**：じゃあ描き始めて、描いているときは、イメージは、この世界がどんどんどんどん広がっていくんですか？

**スズキコージ**：いや、最初はこの絵はね。もう、とにかく絵具をばんばんぶつけて、水もかけたりして。そういう状況ですから、かなりアクション・ペインティングの一番初期みたいな。「ジャクソン・ポロック」じゃなくて、「バクソン・ポロック」みたいな、そういう状況ですね。

だからもうこの辺でやめたらどうかっていう意見も飛び交うくらい... だからどんどん描いていくと、あっ、長新太さんだったらこの辺でやめたんだろうなって思うときがありますよね。だけど、僕の場合はどんどん積み重ねて、えっと、タブローっていうんで

すか？絵にしてくわけですよ。この辺はね、どうしようもない分かれ目ですね。ははは。

**松本**：それで、例えばこれは右下の部分なんですわ。

**スズキコージ**：うん。

あっ、こうやって見るとすごいね。いいね。

**松本**：一枚の絵になっていますよね？で、これはこれでひとつの物語があると僕は思うんだけども。この人のことを考えてるときというのは、ここにこの人物を描き始めてるときは、この手に止まってる鳥とこの人間は何だろうってことを考えたりするんですか？

**スズキコージ**：いや、考えてないね。僕は使われてる身分だね。あの、描かされちゃってる、描かされてるって感じだろうね。この絵なんか、見ていると。

**松本**：これはその上の部分ですね。これもおそらく自然に雪の精みたいなのが飛んできちゃってるみたいに思うんだけど。

**スズキコージ**：うん。

**松本**：それで、下から走ってるじゃないですか？

**スズキコージ**：これは必ず出てくるね。馬が疾走してたりね。

**松本**：この流れみたいなものが、コージさんの絵の中のひとつの特徴みたいな気がしてるんですけども。うわあーっと、こうイメージが浮いてくる？、流れてくるんですか？

**スズキコージ**：まあ、ジャズでいうインプロビゼーションっていうんですかね。即興演奏を僕は絵で行ってるなあと、あのね、思いますけど。自分で言っちゃうと。

**松本**：このとき、描いているときって、音楽は流してるんですか？

**スズキコージ**：うん。このときね。CDで、ジブシーミュージックとかガンガンやってたら、その路地の向こうのおじさんに怒られちゃったりして。「はあー。あんたねー。何これ。何で都はるみかけないの？なに、このわけのわかんないミュージック」って。もう、路上でやってるとね、本当おかしいです。

**松本**：で、これ順番に見てくと、パーツ、パーツがそれぞれの物語をもっているような、僕はそんな気がするんですよ。1m 80cm×2mの世界で、部分の中に次々と描き込んでいく。これがおそらくコージさんの中で描かされてるっていうイメージなんだろうと思うけど。連続してこういうイメージっていうのは湧いてくるんですか？

**スズキコージ**：なんか映画みたいじゃん、これ。

**松本**：そうなんです。僕、なんかこれ見てて…。

**スズキコージ**：短編映画。

**松本**：パーツをみるとすごく楽しくなってね。それで思わずパーツを撮り始めちゃったんですけど。すごいんですよ。



**スズキコージ**：まあ、あの、ロシアの友達でいますけれども、ユーリ・ノルシュテインさんがね。あーいう素晴らしい短編の映画を、アニメーション作ってますけど。

**松本**：ノルシュテインっていうのは『きりのなかのほりねずみ』っていう絵本もでてますけれども、それはもともとはアニメーション。すばらしい、ロシアのアニメーション作家ですね。物凄く時間をかけて作る人です。

**スズキコージ**：まあ、そうね、ノルシュテインさんも僕の個展にね、青山のスペーススуйに見に来てくれたことがありますけれども。

**松本**：このスピード感ってすごいよね。右下からずーっと回転してくような運動感がこの絵にはあって。実はこの第2部で、今日はあの『きゅうりさんあぶないよ』とか『ブラッキンダー』とかの編集者の方も来ているので、あの形而の中でつながっていく動きというのは、こういう1枚の絵の中だと似てるんじゃないかなっていう風に、ちょっと思うので、第2部の時はその辺の話もちょっと聞きたいなと思うのですが。

**スズキコージ**：これもう絵本になるね。

**松本**：そう。もう言葉をつけようがない。それはまた後でちょっとまた。

**スズキコージ**：これね。やるうかな。

**松本**：そう。これ、できちゃうんですよ。

**スズキコージ**：そしたら楽だな。

**松本**：いいでしょ？短編映画みたいでしょ？すごいんですよ。感動した。で、次コラージュを。

**スズキコージ**：あっ、コラージュも見せてくれるの？

**松本**：はい。

**スズキコージ**：FREE TIBETってね。FREE RABBIT フリーラビット... そしたらコージさんBって字違ってますよってね。あの一、なんとかさんが教えてくれてね。ちょっとあーゆーBになっちゃった。

## コラージュ

**スズキコージ**：あっ、これはコラージュの。これあの... 僕アエロ・フロート。ロシアの飛行機の機内誌を定期購読してまして、なんとアエロ・フロートの場合1年間2500円払うだけで、機内誌を送ってくるのね。僕はアエロ・フロートにお世話になって、東ヨーロッパ行ったりしてたもんですから。その写真は雑誌の切り抜きで、結構使ってますね。

**松本**：これは雑誌のパーツをまず切り抜くことから始まるんですか？

**スズキコージ**：もう「解体」、ですね。

**松本**：チョキチョキ、チョキチョキ切って。で、ばあーっと広げて、頭の中で。

例えばこれは巨大な木馬なんですか？

**スズキコージ**：そう。そうそう。トロイアの木馬みたくなってますよね。

**松本**：トロイアの木馬みたいなものを、なんとなく作ろっていうイメージが出てくるんですか？

**スズキコージ**：うん。それとこの引きちぎられた美女ですね。

**松本**：ええ。

**スズキコージ**：これイカすよね。あの非常にスリリングなことが出来ますから、コラージュってのは。あの物凄くおもしろいですね。やってて。

**松本**：コラージュってのは、ようするにコージさんがもっている世界じゃないものが、たくさん写真のなかにあるじゃないですか。

**スズキコージ**：ええ。

**松本**：それを再構築していく作業でしょ？

**スズキコージ**：そうそう。それがスリリングだよ。

**松本**：だから、コージさんの作品なんだけど、コージさんじゃない要素が山ほど入ってくるっていうのは、これをやりたいって思うひとつのポイントなのかなって、思う。

**スズキコージ**：そうそう。もちろんそうですね。まあ、楽しいですね。これはやったらきりが無い。

**松本**：じゃあ、次いってください。

**スズキコージ**：これは...

**松本**：ええ、さっきの「HELP」っていうんです。

**スズキコージ**：これは... 昔の電話機がありますけれども、鼻は... トム・ウェイツの鼻なんですけれども。これは「電話男」って題名にしたんですけども... なんかこういうのもできちゃうからね。おかしいよね。あと修正用インクを減らして使ってますよね。

**松本**：あっこれ、修正インクですか。

**スズキコージ**：ババババババっと。

**松本**：はい。次行ってください。

**スズキコージ**：あっ、これ、アエロ・フロートの切抜きのやつですね。これは僕が旧ユーゴスラビアを旅したときのイメージで。これは僕、傑作だなあって。

**松本**：いや、これは僕は非皆さんに見てもらいたいなあって思って。で、まずここに巨大な女の子の足とスカートがありますでしょ？右側に。

**スズキコージ**：うん

**松本**：そして、これ「ハイウェイ」っていうタイトルなんですけれども、このハイウェイを走っているのがこの荷車じゃないですか？

**スズキコージ**：うん

**松本**：で、もちろん貝も乗ってるんだけど。この女の子の手が... これはヒッチハイクしてるんですよ？

**スズキコージ**：うん。この彼... この巻貝を。

**松本**：巻貝をつまもうとしてるの？

**スズキコージ**：うん。ヒッチハイクもおもしろいね。

**松本**：いずれにしても、その、荷車の下にはね。走ってる、ギリシャの壺かなんかに入ってる人がいたりとか。色んなものが構成されているんだけど、イメージが奥にいたりとか、例えば女の子の周りにはスカートが、スカートってここには切手が山ほど入ってる。これは、その国のイメージとかやっぱり入ってくるでしょうね。

**スズキコージ**：そう... でもやっぱりどこの国でもない世界が、いちばん僕の中では安心できる世界なのかもしれないね。遊べるというかね。

**松本**：多分コラージュの世界っていうのは、コージさんにとって、絵本だけではなく、もうひとつのように重要な世界かなあと僕は思って、この絵を紹介したんですけど。

**スズキコージ**：まあこのときは、おもしろくてしょうがなく、ばんばん頼まれもしないのにどんどん作っちゃって。やっぱり頼まれもしないのに作っちゃうのがいちばんいいね。

**松本**：ということで第1部を終わりにまして、第2部は魅力的なゲストたちと共にお話をさせていただきたいと思っております。

## 第2部

**松本**：第2部を始めたいと思います。コージさんと親しい人たちが今日集まってくれました。まず自己紹介をさせていただきますか。じゃあ、小野さんから。

**小野**：こんにちは。小野明と申します。自己紹介といっても、ようするにコージさんとの関係をちょっと言ったほうがいいと思いますので。「黒の手帖」の「お伽噺集」っていう雑誌を持ってきたんですが、これが1971年に出ました。僕はその時高校2年生だったので、この雑誌を見て、スズキコージの絵を見て、ぶっとびました。

僕は高校時代からずっと編集者になりたいと思っていましたので、なんとしてもコージさんと仕事を出来ればいいかと、それを願いつけていたんですけども。1979年だったかな？最初の仕事をコージさんをお願いできました。その頃、コージさんは長髪で、さっき言った「アカデルミック」ですから、眼鏡が片方、割れていて、ツルをセロテープで補修して、もうプランプランになっている。で、牛乳瓶の蓋みたいな、厚底の多分1センチぐらいのね、厚さの眼鏡をかけていました。

**松本**：牛乳瓶の底ね。蓋は見えないからね。

**小野**：あっ、さすがいいツッコミですね。こういう感じでやりましょうよ。そう、牛乳瓶の底ですね。えー、すごい眼鏡でした。それで憧れのコージさんに初めてお会いして、吉祥寺で。ブルブル震えて、今までずっと、それから約3、4、5年？

**スズキコージ**：そのときなんの用事で会いました？

**小野**：絵本の仕事をお願いしに行ったんですよ。

**スズキコージ**：あの…グリム童話とか？

**小野**：うん。その前の「Happy Talk」という…

**スズキコージ**：英語の本？ ああ。

**小野**：そうです。あれが、最初なんです。あの本で僕はコージさんとお会いできました。

まあ、絵本の仕事をしている者です。よろしくお願いします。

**澤田**：澤田と申します。福音館書店に勤めていたんですが、去年、定年で退職しました。コージさんとは、「子どもの館」という児童文学専門誌でお付き合いが始まりました。たぶん、この中で1番古いのではないかなと思うんです。『きゅうりさんあぶないよ』という絵本と一緒に作りました。お付き合いの時間が長いわりには、絵本1冊ですね。



小野明さん・澤田精一さん・土井章史さん

**スズキコージ**：澤田君とあの…ちなみに同じ年代です。ね？

**澤田**：年は同じですが、僕が4月で、コージさんが2月生まれなので、コージさんのほうが学年が一つ上です。

**スズキコージ**：この前、澤田君は心臓が壊れちゃって、僕は安全な宣告されて胃がんだったからね。とっちゃって。ね。大体この年代って壊れてくるんだよね。「My baby baby ポロポロ〜」

**澤田**：という者です。

**土井**：土井章史と申します。吉祥寺で、小さい絵本のお店「トムズボックス」をやっています。それと同時に編集者でもあります。コージさんとは、『サルビルサ』、『ウシバス』、『おがわのおとをきいていました』を作りました。まあ、『サルビルサ』が一番決定的で、なんかすごいくれたな、っていう感じはすごくあって。それと吉祥寺で、毎年5月にうちで展覧会をやってもらっていますね。それと、3年前に四谷のアートコンプレックスセンターという所で、でっかい展覧会みたいのを。

**スズキコージ**：あれも、良かったね。

**土井**：良かったですね。

**スズキコージ**：伝説の。

**土井**：伝説の、うん。あのプロデュースをやらせてもらいました。スズキコージ：100坪のスペースで。僕のライブペインティングした絵、全部飾りましたから。ね。もう色々。荒井良二バンドだとかね？僕もベリーダンスのお姉ちゃん達と踊ったりで。

**土井**：そうですね。おもしろかった。

**スズキコージ**：『サルビルサ』は本当に…

**松本**：あの、展覧会見られた方どのくらいいらっしゃいます？

**スズキコージ**：あっ、結構…もの好きな方…もう二度とないものね。

**松本**：いや、またやりましょうよ。

**スズキコージ**：あの爆発力あるのまたやりたいですね。

**土井**：はい。

**スズキコージ**：もっともっとああいう展示して、もう飲んだり食べたり、バンドも入って、踊ったりもできるようなね。そういう感じでね。

**筒井**：えー、筒井大介といいます。イースト・プレスで絵本の編集をしています。コージさんとは10年前に、教育画劇という会社にいたんですけど、入ったばかりのときに、仕事の依頼に乗いじうに行って会ったのが最初ですね。それから教育画劇のときにその、1番最初に作った絵本が民話の絵本で…何でしたっけ？

**スズキコージ**：『たこやはちべえ』

**筒井**：あっそうそう。っていうのを作って。で、『エノカッパくん』っていう飛び出す絵本ですね。作って。なんかもう一個やりましたね？『ブンブンバチン』

**スズキコージ**：あーそうそう。

**筒井**：『ブンブンバチン』を作って。で、教育画劇を辞めることに。はい。イースト・プレスに移ってから、その「こどもプレス」というシリーズを作って。そのまあ、かなり初期段階で、コージさんに『ブラッキンダー』っていう絵本を描いてもらいましたね。

『ブラッキンダー』

**スズキコージ**：この『ブラッキンダー』、こんな傑作が出来上がるとも思ってもみなかったね。

**筒井**：そうですね。

**スズキコージ**：「Paint it Black」、ローリング・ストーンズとか『大千世界の生き物たち』のブラッキンっていう黒インクに入ってるのが主人公。で、ぼちぼち大介が言って来る頃、もう出来たかいたななんてね。

**筒井**：そんな感じで。

**スズキコージ**：こんなのだけど、と思って描き出したけど、すごい傑作で。

**筒井**：コージさんラフくれたときは、何かしぶしぶ描いたみたいだな。「なんか大介があんまり言うからさー。まあ、とりあえず描いたけど。俺、これ変えるかもしれないわー。」って言ってました。

『サルビルサ』

**スズキコージ**：『サルビルサ』が土井くんのお産婆役で出来上がってますね。それで、あの頃誰かが、「吠えてくれた」とか、「スズキコージは湾岸戦争だとか、世界の情勢をつかんでいる」とか朝日新聞かなんかで書いてくれたら、全然売れなくて。絶版になっちゃって。そんで、「イメージの森」シリーズだっていう、土井君がつけたの？「イメージの森」がほるぶ出版で出たときは。

**土井**：はい。えーっと、多分そうだったと思う。

**スズキコージ**：片山健さんとか、荒井良二君とかそうそうたる連中がみんな自作自演のね、そういう絵本のシリーズが出て。で、全然売れなかったから、まあ「ダメージの絵本」と言われる。

**松本**：『サルビルサ』はどうやって作るようになったんですか？

**土井**：それはもう簡単です。産婆さんって言われても…本当に企画通しただけなんです。スズキコージさんと絵本作るって言ったら、もう当時のほるぶ出版が「はい、やりましょう。」って言って、コージさんからラフをもらって、まあ「これでやりましょう」って。だからね。なんていうか編集する作業ってなんだろうね、とか思っちゃうね。

**筒井**：そうですね。

**スズキコージ**：まあ、きっと土井君の中で一発目の花火、スズキコージで打ち上げて、みたいなね。まさか「ダメージの森」になっちゃうとは思ってなかったと思う。

**土井**：誰が言ったんだろう。最初…

**スズキコージ**：「イメージの森」ってシリーズだから…当然なるよね。で、そこから生き延びているわけですから。生まれ出たわけですから。僕は大変自慢に思っています。

**土井**：これ最初ね、『サルビルサ』じゃなくて『タルビルタ』だったんですよ。

**スズキコージ**：ああ、そうそう『タルビルタ』。すると、だんだん「タルビルタ、タルビルタ」って言うるとくたびれちゃうんで、もっとスカッと抜けるようになっていうんで『サルビルサ』に決定したのね。

**土井**：もう僕、編集者ってその辺保守的になるから、『タルビルタ』でいこうって気分がすっとなってるから、作家から『サルビルサ』

にするって言われて。ここの変化、心境の変化って大変じゃない？

**筒井**：うん。まあ、そう、よくあること。

**会場**（笑）

**土井**：なんか、一時、『タルビルタ』で盛り上がっていた自分が思い出されました。今。いや、そこら辺なんか微妙な、微妙な、なんか繊細なところがあっちゃったりするんですよね。

**スズキコージ**：まあ、自作自演となるとね。やっぱり日々、刻々変わってくる、結構スリリングなことでもありますから。

**松本**：湾岸戦争のイメージというのが、自分のなかにあった？

**スズキコージ**：いや僕全然湾岸戦争ってのはなくて。ようするにあの、「イメージの森」でイメージがやってきて、こういうのが出来ちゃったわけだね。だからね、自然に出来上がっちゃった。

『きゅうりさんあぶないよ』

**スズキコージ**：誰が作ったかわからないわらべ歌を、ある日澤田君が、どっかから掘り出してくれたんだよね。で、ふたりでながめて唱えてるうちに、あっ、これはもう、くどい選挙演説みたいに、繰り返し繰り返しやって、それでまあ僕流に解釈して。で、最後の方に、「きゅうりさん そっちへいたら あぶないよ ねずみがでるから。」で、本当にねずみが出てきちゃって。で、ねずみはロシアマフィアみたいな格好で登場させて。それでねずみマフィアが、きゅうりさんの、もうもう、ね、きゅうりじゃないような、ものすごい格好のきゅうりを見て、「あぶない」なんて言っちゃって。ネズミが逃げ出して、きゅうりさんが追っかけてくるっていうそういうストーリーに、僕が勝手にしちゃったわけで。

**澤田**：それでいいんです。

**松本**：もともとはどういうのだったんですか？

**澤田**：編集部の同僚が、ロシア文学の翻訳をしている方から聞いてきたんです。こんなわらべ唄があるって。でもそれは間違っして聞いてきたんです。実際はちゃんとオチがあって、「きゅうりさんのしっぽが短いのは、ねずみがかじったからだよ」という内容なんです。ありきたりなんです。「きゅうりさん そっちへいたら あぶないよ ねずみがでるから」のほうのはるかに謎があって、だから絵本になると思って、コージさんをお願いしました。

**松本**：コージさんでやろうと思ったのは、どういうところからなんですか？

**澤田**：やはり、ロシアだったらコージさんでしょう。それと、コージさんを「こどものとも年少版」に登場させたかった。今までの「年少版」は幼児向けだということで、簡単なストーリーと単純なイラストでつくられていた。でも絵本なら、子どもは絵を見て遊ぶわけでしょう。だとするなら「年少版」であっても、文はそのままでも、絵は複雑とか、しっかり描かれた絵が必要だと思いました。

**松本**：登場人物が出てきて、その部分が次のところに全部重なってきますよね？コージさんが考えたんですか？

**スズキコージ**：まあ、もう簡単だったね。なんか描けちゃうよ。しかもおひつじ座とうお座のコンビだから。

## 『注目の多い料理店』

**スズキコージ**：あれは宮澤賢治のミキハウスの本で第一発目の本だったんだね。

**小野**：そうですね。やっぱりコージさん、一発目に選びたくなるんですよね。

**スズキコージ**：その…一番にやらせちゃうっていう…打ち上げ花火。最初にやらせちゃう。まあ、まず相手に毒見させて。後、継続していこうみたいな。

**松本**：これはスクラッチボード？くぎで削って…。

**小野**：スクラッチボードに描いていて、色は黄色版、オレンジ版と、青版ですね。トレーシングペーパーに描いて、重ねるんですね、印刷で。だから重ねて絵になるためのテクニックが必要なんですよ。奔放に描いてるところもあるんだけど、すごく繊細にもうかなり、ぴたっと四版を合わせないと、きちっとこういうふうな絵にならないんで、この原稿を見たときは、震えましたね、その繊細さに。

**スズキコージ**：うん。だけど、片山健さんがこの絵を見て「スズキさん、これ色が無いほうがいいね。」って。あの方ははっきり言うからね。

## スズキコージとは？

**小野**：たぶんコージさんの人柄も含めて、「全国籍」という言葉かなと思ってんですよ。「無国籍」という言葉がありますよね。国籍がない。国を横断するとかね。多分コージさんは全国籍、全ての国籍を持っている人で、コージさん本人も絵本も、全部の国の人が、日常生活の暮らしをする上でヒットする部分を必ずもっている。

**スズキコージ**：まあ、そういうふうに褒めてもらおう…まあ、僕は動物だっていう。渡り鳥とかね。パスポートを持ってなくていいわけじゃない。好きなとこ飛んでけばいいわけだね。こっちは暑いな、あっちは寒いなみたいな。そういう感じで言ってくれるような気もしますね。

**小野**：まあ、そうですね。はい。

**スズキコージ**：ははは、簡単じゃん。

**澤田**：コージさんは分類できないですよ。もし分類するのであれば、「スズキコージ」がひとつのジャンルであると。それだけのことだと思う。今までの絵本作家の多くは絵本を描くだけで、他のことはあまりやらない。禁欲するんです。宮澤賢治なんかは、童話を書くだけではなくて、作詞・作曲も、戯曲も、論文も書くとか、とにかくいろいろやるでしょう。コージさんも、巨大な壁画、舞台美術、立体、装幀、LPやCDのジャケットデザイン、パティック、切り絵……マンガも描きましたね。

**スズキコージ**：あー怪しげなジブシーバンドもやっていますよ。

**澤田**：ほんとうに多彩な活動です。ほんとうに希有な存在だと思います。

**土井**：4、5年前コージさんと飲んでいるときに、僕はざらっと聞いて、ざらっと流した言葉があって、コージさんは「大人に怒られる気がする」っていう感じのこと言ったんですよ。怒られる

側ってというのがね、コージさんじゃないかと思うんですよね。

**スズキコージ**：まあ、言葉変えると『大人は判ってくれない』っていう、フランソワ・トリュフォーの昔の映画があって、僕はもう64歳にもなっているけど、いまだに「大人は判ってくれない」という気持ちがあるのは何故でしょうね。

**土井**：何故でしょう。でも怒られる気分っていうのは、好きなんですかね？

**スズキコージ**：「こら！コージ」「またあそこの梨畑で梨盗んできて…」って。実際にね。スイカ盗みに行ったり田舎で仲間とやってたけどね。

**土井**：でも、今でもやるでしょ。

**スズキコージ**：まあいたずら好きなことは確かよね。そういうのは絵本に反映してると思うんですけど。だけどここの全員かなり、そういうイタズラ坊やというか。そういうものは感じているからね。僕も楽しくここまできてる。まだまだ、みんなとやりたいなあと思っていますけど。

**筒井**：まあ、どういう人なんだろうなあって、10年前に会ってから頻繁に考えるんですけど、いまだになかなか、こういう人っていうのは言えなくて。

変な言い方すれば複雑怪奇な人だなあと思っていて。なんかすごい豪快なようで、で、勢いだけでいっているようにみえて、ものすごい読書量とか、とにかく博覧強記なところもあるし。めちゃくちゃ締め切り守ってくれますし。

**スズキコージ**：頼まれもしないのに、「はいできました」とかね。

**筒井**：そうなんです。締め切りの概念がないくらい。一応締め切りを伝えると、やや渋い顔しますね。「あっ、これ出来るかどうかわかんねーな」みたいな、感じに毎回言われるんですけど、1カ月2カ月前に電話かかってきて、「もう出来たから、来いよ」みたいな感じなので。なんかねわかんない。コージさんがこういう人だって誰かに説明しても、どっかででも、コージさんの別の要素を見落としてるような気がするのです。

あとは、そうですね。ちょっとね、おじさんとか嫌いだっただですよ、20代前半の頃。コージさんに会って、「あー。こういう大人がいるのか。」と。こういう大人、あんまりいないんですけど、「あっ、いたな」と思って。まあ、そういう存在ですかね。

## 参加者からの質問に答えて

**松本**：本当は会場の方たちとトークをしたかったんですよ。でも時間が少なくなってしまいました。質問を書いてもらっていたので、コージさんがここから好きなものをとって、それについて答えてください。

**スズキコージ**：「絵を描く技術」ね。ようするに色がつけばいいと思っていて。醤油で描いたり、ソースで描いたりしたこともありますけど。割り箸を削ってインクをつけて描いたり。まあ、色々いろんなことをやってみるわけよね。

絵を描く技術っていうより、石ころ拾って並べてね、それで絵になっちゃうし。そんな子ども達が自然にやってることなんで

すよね。あと、枯葉だとかね。そういうものを拾ってきて、並べて自分の絵にするし。もうそういうところは千変万化っていうんですかね。どんなものでもその人のセンスによって絵になってしまうって、僕は思ってます。はい。

**スズキコージ**：えっと「パワフルを維持できる、パワフルでいられる気持ちはなんだと思いますか？」パワフルでいられる気持ち…。そうね、何だろうね。あっ、今日新幹線で来ましたから、うなぎ弁当食べながら来て、結構元気かもね、とかすごい単純なことだと思うんですけどね。そうね世の中ね。この前自民党が完全に制覇しちゃって、はっきりいって物凄くガックリしています。もうこれだと時代がどんどん逆行しちゃってね。今日も新幹線のテロップで出ましたけれども、今の総理大臣はまだ原発を作る気していると、もう「なにー」みたいなね。僕はもう頭にきていますけどもね。

**スズキコージ**：言論の自由っていいですかね。これから絵本というのはかなり政府が弾圧してくる可能性が出てくるのではないかって予想されます。すごく恐ろしいことで。どうやら、憲法第九条をなくしてしまうことは、もう、どうみてもやるだろうなっていう感じですね。ということは戦争に。日本が軍隊も作って国防軍ですか、そういうものを作るって言ってますから、これはもう徴兵制度をやると。これは時間の問題で、じわじわと出てくる可能性が大いにあります。それで僕らの携わっている絵本に、何らかの圧力がくるのではないかなって思っていますね。それがきたら、どっちかっていったら僕はやる気になっちゃうほうなもんですから、そうなってくるとね。僕も親父に絵を破られたり、魔法使いの等身大のものを作って、それを蹴飛ばされたりして、もう全壊やられちゃったことがあって、もう余計燃えて、現在に至るわけですね。みなさんも本当にその辺はふんどしない人はね、ベルトを締めてですね、注意深く、世の中がそういう言論統制してきたら、本当にはねのけてください。僕も…僕はみなさんがやらなくても僕ひとりでもやりますから。そんなつもりでいます。

この前、筒井大介君からも「コージさん、こういう世世になってきたら、これ、好きな絵本出せなくなっちゃう可能性あるかもしれないから、なんかやろうよ」とか言われてね。僕も「ああ、かなりやばいことになってきてる」と、これは。今日編集の人なんかもね、第一線でやっていらっしゃる人達がいるので、言わせてもらっています。

**松本**：まあ、実際に軍隊になれば、間違いなく徴兵になっていくでしょうし、強い日本を作るということが大切なのか、本当に自分たちの3.11後の生き方を、これでよかったのかということを考えなくちゃいけない、分かれ目にきているところだと思うんですよね。

まあここは絵本学会の場で、これを論議する場ではありませんけれども、やっぱり表現をする人達にとってみて、表現の自由をきちっと守っていくこととか、それから子どもの文化を大切にすること。例えば大阪の国際児童文学館は、予算がつかなくなって合併させられてしまいましたけど、そういうことが行われていく時代に差し掛かるということは、私達も黙っているわけにいけないと思います。

**松本**：時間が大分超過してまいりました。ここで今回の「スズキコージ解体」というイベントは終了させていただきます。会場はもう少し使えるようです。コージさんもまだいらっしゃると思いますので、喋りたいという人がいらしたら、寄ってきて話をしていたらと思います。決して恐い人ではございませんので、見た目よりはずっと優しい人です。ということで今日は閉会にさせていただきます。本当にありがとうございました。

**スズキコージ**：はい。みなさん、ゲストのみなさんも、ありがとうー。  
**松本**：あの、「コージさんの歌を知っていますか」という質問があったんですけども。

**スズキコージ**：そんな歌あったっけ？

**松本**：あるんです。誰か歌う人いますか？

**参加者**：はい！

**松本**：じゃあ今日は、その歌を聞きながらお別れにしたいと思います。毎日歌っているらしいですよ。

**参加者**：短い曲です。私は全然絵本とは関係なく、図工の教員です。

**スズキコージ**：いやいや、関係ありますね。

**参加者**：（ハーモニカとともに参加者のひとりが歌う）

「スズキコージ～、スズキコージ～、スズキコージは絵を描くよ。スズキコージ～・・・」

**会場**：拍手

**スズキコージ**：はっ、ありがとう。これは、わかりやすいね。みなさん今日はありがとうー。（終）

〔記録 今田由香〕



筒井大介さん・スズキコージさん・松本猛さん・参加者



参加者にプレゼントされたポストカードの原画



当日、会場に集まったスタッフや関係者の皆さんと（一列目中央が筆者、むかって左隣りが新妻さん、一番右が攪上さん、三列目左が武田さん）

前回のリレーエッセイを書いた武田美穂さんと、12月26～27日、南相馬へ行くことになりました！

「子どもたちへくあしたの本」プロジェクト（呼びかけ団体：日本国際児童図書評議会、日本出版クラブ、出版文化産業振興財団）が企画した、絵本作家による被災地訪問イベントに、憧れの武田さんとペアで行けると聞き、ふたつ返事で依頼を引き受けたのです。

私の役目は、紙芝居。ふだん、海外の絵本や物語を翻訳する仕事をしている私は、もうひとつのライフワークとして、日本で生まれた紙芝居を、国内&海外で広めています。絵本は「個」を育み、紙芝居は「共感」を育む文化。その両方を大切なものとしてとらえ、子どもと大人に届けています。

ひとつの物語を読み解いて、自分の「言葉」で伝えるという点では、翻訳も紙芝居もおんなじ。けれども、伝え方がまったく違うところに面白さがあります。

たとえば、絵本の翻訳をするとき、私は文章を「書く」ことで、目の前にいない読者に向けて、作家の世界を伝えます。いっぽうで紙芝居を手にしたときは、「演じる」ことで、目の前の観客に向けて、作家の世界を伝えます—そして「演じる」ことは、絵本を声にして読むこととも、演劇ともまた違っているのです。

私は「紙芝居文化の会」の仲間たちと、そんな紙芝居の世界を深めつつ、広める活動を十年以上つづけてきました。

今回の訪問先は、障がいをもつお子さんたちが、放課後や学校が休みの期間に通う支援施設くじゅにあサポート「かのん」>。

「かのん」とのやりとりを一手に引き受けてくれたのは、絵本学会員で臨床発達心理士の攪上久子さんです。上記のプロジェクトでは、攪上さんが中心となって、野馬追文庫（毎月一度、現在36カ所ある仮設住宅に子どもの本を2冊ずつ届ける活動）という南相馬

への支援を続け、震災後をずっと見守っています。

攪上さんによれば、とりわけ発達に遅れのある児童に困難が集約されて押し寄せ、そんな子どもたちのために、市民が立ちあがってNPO法人「きぼう」をつくったのだそうです。現在くきっずサポート「かのん」>とくじゅにあサポート「かのん」>の二つが、「きぼう」によって運営されています。

いよいよ、12月27日の朝。幼児から中学生までの子どもたち、保護者の方々など約50名が、集まってくれました。となりの相馬市の療育施設からやってきた子どもの姿もあります。みんなのまえで、攪上さんが「えっちゃん先生とみほちゃん先生ですよ」と私たちを紹介して、イベントが始まりました。

まずは、私の出番。『ごきげんのわるいコックさん』『みんなでぼん！』（まついのりこ作 童心社）という、観客参加型の紙芝居を演じました。

「さあ、なんだろう」と呼びかければ、「ロボット！」と吸いつくように答え、私と会場の橋渡ししてくれた男の子が、コミュニケーションの発達に遅れのあるお子さんと、後から聞きました。予想外の積極的な反応に、スタッフの方たちも驚いたといいます。

つぎに武田さんが『ありんこぐんだん、わはははははは』『オムライス、ハイ！』を表情豊かに読みました。うまい！ そのあとが「キラキラバッチをつくらう」のワークショップです。



# これがキラキラバッチだ!!



参加者みんなが、サラララップの上からマジックで下絵をなぞり、そこに色を塗ります。描けた絵を、こんどは大人の私たちがアルミホイルでくるんだ丸い紙にかぶせて、後ろをテープで止め、リボンをつければ完成です。

「むずかしすぎたかな」と、入念に準備をしてきた武田さんは少し心配そうでしたが、始まってしまえばリボンつけに大忙し。ステンドグラスみたいなバッチを作る子、がんこちゃん(末吉暁子さん原作・脚本の『ざわざわ森のがんこちゃん』にでてくる恐竜の女の子)の絵を選ぶ子もいて、わずか40分間で、100個以上のキラキラバッチができました！

地元の読み聞かせグループ「本のとも ありの会」のメンバーも、この日は特別参加。全体で1時間半のプログラムのあいだに、攪上さんが手遊びを入れて、子どもたちの緊張を解きほぐしました。そして全員キラキラバッチをつけて、大満足の記念撮影です。最後に参加者の皆さんから、寄せ書きの色紙をいただきました。

「かのん」に通っているのは、比較的軽い障がいをもつお子さんたちです。ADHD、アスペルガー症候群、情緒障害などをもつ児童に、学習支援、コミュニケーション支援を個別トレーニングで行っていて、「ここは対人関係を構築するスキルを学ぶための事業所」だと、所長の新妻直恵さんはいいます。

「絵本は欠かせません。毎日、子どもに音読してもらっていますよ。これが怒っている顔、これが嬉しい顔と、子どもたちは絵を見て、周囲の人の感情を読み取るすべを覚えます。そして、悲しいときはこう言うんだと、気持ちを表す言葉を豊かにしていきます」

保護者への働きかけも大切にしているそうで、「悩みながら子育てするお母さんたちの話を聞く、まあ、”駆け込み寺”みたいなところですよ」と、新妻さんは笑顔で話してくれました。

自分の「声」に、しっかり耳を傾けてくれる人がいる—その信頼感が、絵本を読む子どもたちを変え、お母さんたちの不安をひととき解きほぐすのでしょうか。「かのん」には、とても良い空気が流れていました。

絵本を大事にしているこの施設に、私の訳した『リッキのたんじょうび』（フレーベル館）と『たいせつなてがみ』（セーラー出版）も並べてあり、「これはいい本ですね」と言われたことが、私のキラキラバッチになりました。

さらに「来年は紙芝居も取り入れたいです。子どもたちが自然にコミュニケーションをとろうとしたのに、びっくりしたので！」と、いってくださったことが、二個目のキラキラバッチに。



この2年間、がむしゃらにやってきたという南相馬の人たち。相当がんばっているけれど、単調な日々なので、こうして外から人が来てくれることが、子どもたちにとっても私たちにとっても、ほんとは嬉しい。新妻さんはそう話してくれました。



「かのん」の皆さん、待っててくださいね。紙芝居と絵本を持って、かならずまた行きますよ～！

## 事務局からのお知らせ

### 第3回 絵本学会理事会議事録

日時：2013年9月21日(土) 14:00 – 18:00

会場：日本女子大学 新泉山館 児童学科会議室

出席者：松本猛、石井光恵、今井良朗、今田由香、佐藤博一、藤本朝巳、本庄美千代、松本育子氏（第16回大会報告、第17回大会についての審議にのみ出席）

#### ○ 報告事項

##### 1. 会長

第3回理事会開催についての挨拶及び、9月13日に行われた「鳥越信先生を偲ぶ会」(会長出席・挨拶)についての報告がなされた。

##### 2. 前回第2回絵本学会理事会議事録の確認

第2回絵本学会理事会議事録が承認された。

##### 3. 第16回絵本学会大会について

第16回大会担当理事の今井・佐藤理事より、大会校からの報告書をもとに第16回大会についての詳細な報告がなされた。

・2日間の参加人数：

会員 121名 一般 60名 学生 25名 計 206名

・本大会は諸所の事情で、準備期間が短かったため、大会を開催された静岡文化芸術大学のスタッフには大変なご苦労をおかけし、感謝している。

・大会でのプログラム進行中の写真撮影や録音禁止について、不徹底であったことが反省点として、あげられた。録音や写真撮影したものを無断で公開することは、権利侵害となることから、次回以降の大会では、チラシやプログラムに明記するなどして、徹底をはかることになった。

・絵本学会 NEWS での大会報告は、今後広報委員会で取りまとめるため、発行に時間がかかる旨が報告なされた。

##### 4. 事務局

① 今年度作成された新名簿作成を、ブックエンドの発送と同時したことが報告された。

② 「ブックエンド2013」の発送を8月に行い、朔北社との未収金の処理も無事終了した旨、報告された。

##### 5. 各委員会報告

###### 1) 企画委員会

12月14日(土)に、片山健氏を招き、フォーラムを開催することになった旨、報告された。

###### 2) 紀要編集委員会

紀要編集委員の香曾我部理事が欠席であったため、紀要「絵本学」のカラーページの料金についてと「絵本参考文献目録」の作成者交代についての、紀要編集委員会よりの意向メモが代読された。

###### 3) 機関誌編集委員会

8月に「絵本 BOOKEND 2013」を制作、発行した旨報告があった。機関誌編集委員会の藤本理事より、「絵本 BOOKEND 2014」の企

画案が配付され、説明された。

###### 4) 研究委員会

9月8日(日) 13:30–16:00 世田谷文学館において、同館の協力の下、研究会が無事開催された旨の報告があった。参加者は 119名。

###### 5) 広報委員会

第16回大会報告の取りまとめのこともあり、NEWSの発行は11月になる見通しであることが、報告された。

###### 6. 事業後援について

以下5件の名義後援を行った旨、報告された。

① ちひろ美術館「ずっと長さんとともに―長新太が描いた子どもの本―」

② ちひろ美術館「ちひろと初山滋―永遠のコドモ―」展

③ コニカミノルタプラザ「降矢奈々＋フィリップ・ジョルダーノ展 異郷に生きる絵本作家（仮称）」

④ 刈谷市美術館「井上洋介図鑑展 漫画、タブロー、絵本」

⑤ 刈谷市美術館「レオ・レオニ 絵本のしごと」

###### 7. 絵本学会への寄贈本について

こぐま社の絵本研究会より、『こぐま社の絵本研究』（「こぐま社の絵本」研究会編）の献本があった。

#### ○ 審議事項

##### 1. 第17回大会（2014年度）について

次回大会開催地刈谷市美術館の松本育子氏出席のもと、下記のことが検討された。

① 日時・会場：2014年5月31日(土)、6月1日(日)、刈谷市総合文化センター

② 大会テーマ：絵本とアート ― 副題未定 ―

③ 5月31日 宇野亜喜良氏による講演とライブ・ペインティング

④ ラウンドテーブル

1) 表現：瀬川康男、2) レオ・レオニ（コーディネーターを香曾我部理事と交渉）、3) 絵本で遊ぶ（サブタイトルを入れる。愛知県内でコーディネーターを探す）

⑤ 担当理事：佐藤博一理事、もう1名として香曾我部秀幸理事が候補となった。

##### 2. 入退会者について

下記入退会者が報告され、承認された。(敬称略)

・入会者（6月17日～9月20日）

西坂小百合、大西雅子、安田悟、星野由美、田村敏弘、土井安子、岡澤陽子 計7名

・退会者 柴田哲谷

##### 3. 第19回大会（2016年度）について

新事務局に移行する年度の大会開催地を決定しておく方が、大会運営及び学会運営が円滑に進められることから、第19回大会（2016年度）を京都女子大学に開催をお願いすることになった。

##### 4. 国立青少年教育振興機構（絵本専門士養成）への広報関連協力について

独立行政法人国立青少年教育振興機構より依頼のあった、「絵本専門

士養成講座」のチラシを会員へNEWS発送時に同封すること等の協力をすることが了承された。その他の絵本学会の協力については、詳細が不明なため「絵本専門士」についてのより詳しい情報を依頼し、それをもとにして今後継続的に検討していくことになった。

##### 5. 紀要「絵本学」のカラーページ掲載について

紀要のカラーページ掲載については、第16号は第15号の費用徴収方法を踏襲する。2014年度の予算時に、第17号のカラーページ掲載について、予算化を含め検討していくことになった。

##### 6. 紀要の「絵本参考文献目録」の作成者交代について

紀要委員会から出ている見解を基に、紀要掲載の「絵本参考文献目録」の今後について話し合われた。紀要委員会として調査費・制作費・交通費などの必要経費について、具体的にどの位の額を予想しているか、問合わせることになった。予備費からの支出で検討していくことになった。

##### 7. 20周年記念事業について

懸案になっている絵本学会賞の検討なども含め、他の事業計画と合わせて今後継続して審議して行くことになった。

##### 8. 次回理事会開催日程

2013年12月15日(日) 14:00～ 日本女子大学 児童学科会議室

### 第4回 絵本学会理事会 議事録

日時：2013年12月15日(土) 14:00 – 17:00

会 場：日本女子大学 新泉山館 児童学科会議室

出席者：松本猛、石井光恵、今井良朗、今田由香、香曾我部秀幸、笹本純、佐藤博一、武田美穂、本庄美千代、松本育子氏（第17回大会についての審議にのみ出席）

#### ○ 報告事項

##### 1. 会長

12月14日(土)に片山健氏を迎えて行われたフォーラムについての話があった。2年続けてのフォーラムが盛況だったことを踏まえ、絵本作家の方々にも積極的に会員としての入会を誘いたい旨の抱負が述べられた。

##### 2. 第3回絵本学会理事会議事録の確認

第3回絵本学会理事会議事録が承認された。

##### 3. 事務局

「絵本学会 NEWS No.49」を11月21日に発送した旨、報告があった。

##### 4. 各委員会報告

###### 1) 企画委員会

12月14日(土)に開催された絵本フォーラム2013「片山健『私のおなかの中の小さな人 あるいはマグレ様の思し召し!』」についての報告が、今田理事よりなされた。参加者は会員35名と一般を合わせて100名を越え、盛会であった。

今回は、会員の参加費を無料にしたが、これが大変好評であった。

###### 2) 紀要編集委員会

今年度の紀要「絵本学」第16号には、6本の投稿があり、11月24日に開かれた紀要編集委員会で、論文3本、報告1本の計4本が採用となった旨、香曾我部理事より報告があった。

###### 3) 機関誌編集委員会

藤本理事が欠席のため、代わって事務局より藤本理事よりの下記の発言が伝えられた。

・2014年度も9月の刊行を目指したい。

・近日中に機関誌編集会議を開き、テーマを決定し、動きだす予定

・特集については「絵本の表現と研究方法」を考えている。

###### 4) 研究委員会

笹本理事より、「研究助成金申請」の選考結果が報告された。2件の応募があったが、検討の結果、2件とも不採用とすることが報告され、承認された。

###### 5) 広報委員会

「絵本学会 NEWS No.49」を発行した旨の報告があった。

また、12月15日の午前中に開かれた広報委員会の報告がなされた。今後の学会ホームページ運営が中心に話し合わせ、「広報」と「情報交流」を目的として新たにソーシャルメディアを利用する、ホームページは「ドキュメントの保管」「スムーズな事務手続き」の機能を充実させる、という将来構想と、具体的な運用イメージの案が提示された。

##### 5. 事業後援について

事務局より下記2点の事業後援の紹介があり、後援をすることが承認された。

① (株) イデッフ「クヴィエタ・パツォウスカーとチェコの絵本展」

② 絵本の森美術館「イギリスの絵本原画展～時代を織りなす画家たちの軌跡～」

##### 6. 絵本学会への寄贈本について

事務局より、下記2点の献本が紹介された。

・『絵本で読みとく宮沢賢治』水声社

・図録『アートが絵本と出会うとき―美術のパイオニアたちの試み―』うらわ美術館

#### ○ 審議事項

##### 1. 入退会者について

下記6名の入会者（9月21日～12月14日）が承認された。  
上原佐恵子、藤田優一、山本恵子、村井貴、植草一世、梅澤尚子 計6名(敬称略)

##### 2. 第17回絵本学会大会（2014年度）について

松本育子氏より、次回大会についての提案がなされ、審議の結果下記のことが決定した。

① 第17回絵本学会大会実行委員会の組織

・委員長 鈴木直樹(刈谷市副市長)

・副委員長 香曾我部秀幸理事(絵本学会、第17回担当理事)

・委員 太田武司(刈谷市教育委員会教育長)をはじめ、大中隆志、鈴木穂波、中村僚志、藁谷はるか、磯部洋子、佐藤博一(絵本学会、第17回担当理事)

- ・事務局 鈴木克幸（刈谷市文化振興課長）をはじめ、  
安藤誠、松本育子、神谷剛生、鶴飼幸代
- ② 第17回大会の開催者表記について  
主催 絵本学会・刈谷市美術館  
共催 刈谷市総合文化センター
- ③ 第17回絵本学会大会のテーマ  
テーマ：絵本とアート  
(集合図で表記する。表記については、佐藤理事が制作する)  
副題：絵本の作り手たち、その創造力
- ④ スケジュールとタイムテーブル及び作品発表・ラウンドテーブルについて  
・5月31日(土) 12:00 受付開始、12:40～開会式に始まり、  
18:00 交流会までのスケジュールが決定した。  
・6月11日(日) 8:30 受付開始から、閉会までのスケジュールが  
決定した。  
・2日目作品発表について⇒作品発表では作品は原則持参とし、  
その他作品発表の募集要項を佐藤理事がまとめることになった。  
・ラウンドテーブル R1「再考・瀬川康男の絵本表現」(仮) コーディ  
ネーター (広松由希子)、R2「レオ・レオニの絵本」(仮) コーディネ  
ーターとして藤本朝巳理事が決定、R3「子どもと絵本をよみあうー  
かがくいひろしの絵本の場合」コーディネーター (鈴木穂波)
- ⑤ 開催趣旨について  
松本育子氏より「開催趣旨」の文案が示された。それを受けて、そ  
の「開催趣旨」に絵本学会の意向を佐藤担当が文案としてまとめ、  
それを入れて全体を調整して行くことになった。
- ⑥ 会長と大会担当理事の佐藤理事が、刈谷市と日程を調整し、挨拶  
かたがた現場視察に出向くことになった。

⑦ 松本育子氏より「第17回絵本学会大会実行委員会設置要領」案  
が示され、理事会で承認した。

3. 紀要「絵本学」の「絵本研究参考文献目録」作成について  
継続審議となっていた、紀要「絵本学」の「絵本研究参考文献目録」  
作成について検討された。その結果、第16号については正式に文書  
で学会より丸尾・永田氏に依頼し、制作費（調査並びに作成にかか  
る費用）として予備費より5万円を充てることになった。今後毎年、  
年度予算として予算化して行くことになった。

4. 20周年記念事業について  
20周年事業について意見が交換された。10周年のときには、10年  
をまとめたアーカイブ作りをしたが、またその後の10年間の記録と  
してアーカイブ作りは必要との意見が出された。

5. 次回理事会開催日程  
次回理事会は、2014年3月2日(土) 14:00～ 日本女子大学に  
おいて行なわれることになった。(会長と佐藤理事が刈谷市の会場を  
視察後、2014年4月12日(土) 14:00～に変更することになった。)

6. 「特定秘密保護法」への撤廃抗議について  
会長からの提案で、「特定秘密保護法」の撤廃を訴える抗議を、絵  
本学会理事名で絵本学会から発信して行くことになった。文案は  
会長が作成し、各理事に諮った上で決定し、各機関へ発信して行  
く。絵本学会のホームページには早急に抗議文を掲載すること等  
が、申し合わされた。

以上

## 絵本関係展覧会情報

### ● 安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原  
0261-62-0772, 0261-62-0774 (Fax)  
<http://www.chihiro.jp/azumino/>

【展示】ちひろ没後40年 絵本になった!『窓ぎわのトットちゃん』展  
【企画展】ちひろ美術館コレクション 絵本・のりもの博覧会  
14.3.1(土) - 5.13(火)

### ● ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井 4-7-2  
03-3995-0612, 03-3995-0680 (Fax)  
<http://www.chihiro.jp/tokyo/>

【展示】ちひろ没後40年 - 世界中の子どもみんなに平和としあわせを-  
【企画展】- Paper Talks 紙のおしゃべりクヴィエタ・パツオウス  
カー展  
14.3.1(土) - 5.18(日)

### ● 射水市大島絵本館

〒939-0283 富山県射水市鳥取 50  
0766-52-6780, 0766-52-6777 (Fax)  
<http://www.ehonkan.or.jp/>

【展示】よしながこうたく絵本原画展  
14.2.8(土) - 3.27(木)

### ● イルフ童画館

〒394-0027 長野県岡谷市中央町 2-2-1  
0266-24-3319, 0266-21-1620 (Fax)  
<http://www.ilf.jp/>

【企画展】第7回 日本童画大賞展  
14.1.30(木) - 3.31(月)

### ● 刈谷市美術館

〒448-0852 愛知県刈谷市住吉町 4-5  
0566-23-1636, 0566-26-0511 (Fax)  
<http://www.city.kariya.lg.jp/museum/index.html>

【展示】宇野亜喜良展 本にみる少女譚  
14.3.1(土) - 4.13(日)

### ● 軽井沢 絵本の森美術館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町風越公園 182  
0267-48-3340, 0267-48-2006 (Fax)  
<http://www.museen.org/ehon/index2.html>

【企画展】イギリスの絵本原画展 時代を織りなす画家たちの軌跡  
14.3.1(土) - 6.9(月)

### ● 世田谷文学館

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 1-10-10  
03-5374-9111, 03-5374-9120 (Fax)  
<http://www.setabun.or.jp/>

【企画展】星を賣る店 クラフト・エヴィング商會のおかしな展覧会  
14.1.25(土) - 3.30(日)